

総目録

著者	タイトル	巻 頁	出版年	項目1	項目2
神学ダイジェスト研究会	〈巻頭言〉刊行にあたって	1 2		巻頭言	
Y・コンガール	母なる教会	1 3~6		教会論一般	
R・シュナッケンブルク	信仰の聖書的概念	1 7~12		信仰	
C・デーヴィス	説教の神学	1 13~17		司祭職	
L・デップナー	司祭生活	1 17~18		司祭職	
K・ラーナー	今日の司祭の信仰	1 19~22		信仰	
J・ダルク	教会と世間における修道生活の役割	1 23~26		修道生活	
L・ルグラン	独身生活	1 27~29		修道生活	
L・エルシ	黙想から観想へ	1 30~32		祈り	
R=L・ウシリン	教会における一般信徒の立場	1 33~36		位階制	
A・ベーム	世に仕えるキリスト者	1 37~39		信仰生活	
越前喜六	〈巻頭言〉無題	2 2		巻頭言	
H・ジェニー	典礼憲章の一般方針	2 3~ 6		典礼憲章	
L・ボロス	現代神学における死と死後の諸問題	2 7~11		終末論	
L・ベルナルト	司祭の独身と性的問題	2 12~15		司祭職	
K・ラーナー	霊を消すなかれ	2 16~18		神学的エッセイ	
M・D・シュニユ	時のしるし	2 19~23		神学的エッセイ	
J・ジント	初代教会における復活	2 24~28		復活	
F・カルデーニャ	完全な純潔と人間の感情	2 29~32		修道生活	
B・ヘーリング	不妊薬に関する神学的考察	2 33~35		性倫理	
D・マイヤー	真の従順に反する奴隷根性	2 36~37		修道生活	
越前喜六	〈巻頭言〉キリスト教の土着化について	3 2		巻頭言	
S・リヨネ	宇宙の救い	3 3~10		終末論	
A・ベア	エキュメニズムに関する教会の実践	3 11~16		エキュメニズム	
R・ラトゥレール	啓示と歴史と託身	3 17~21		啓示	
M・D・シュニユ	貧しき者の教会	3 22~24		教会論一般	
P・アンシオー	告解の秘跡と教会の関係	3 25~28		ゆるし	
F・ウタール	都市における小教区の問題	3 29~33		司牧	
A・ヴェルゴート	大人の信仰生活の心理的条件	3 34~38		司牧	
F・ヴルフ	独身生活と童貞性	3 39~41		修道生活	
越前喜六	〈巻頭言〉将来の本誌の展望	4 1		巻頭言	
I・コロシオ	現代の霊性	4 2~8		霊性神学	
K・ラーナー	キリスト教と他宗教	4 9~17		諸宗教の神学	
『アメリカ』誌	なぜカトリック教徒になるのか	4 18~19		神学的エッセイ	
H・ラーナー	教会の本当の姿	4 20~28		教会論一般	
司教覚書	貧しき人々の教会	4 29~30		教会論一般	
K・コンドン	旅路の教会	4 31~38		教会論一般	
H・ツァーナー	現代世界に開かれた教会	4 39~43		教会論一般	
J・クイン	エキュメニズムと聖体	4 44~50		エキュメニズム	
I・ゲレス	司祭の独身は時代おくれか	4 51~58		司祭職	
E・リドー	レジャーの神学	4 59~64		信仰生活	
海老原謙吉	テイヤール・ド・シャルダンの聖体思想	4 65~72		聖体	

総目録

L・ベルナル	産児調節と人間の性	4 73～77	生命倫理
P・ネメシエギ	〈巻頭言〉無題	5 1	巻頭言
K・ラーナー	将来のキリスト者	5 2～9	教会論一般
K・ラーナー	知られざるキリスト者	5 10～17	諸宗教の神学
A・ジャニエール	無神論と現代	5 18～25	無神論
J・ライリー	聖書をどう読むか	5 26～34	信仰生活
I・de ラ・ポトリ(ポトゥリ)	聖書にはあやまりがない	5 35～42	啓示憲章
A・ベア	教会とキリスト教以外の諸宗教	5 43～49	諸宗教の神学
J・ダヴィド	新しい結婚観	5 50～56	婚姻
O・ゼンメルロート	正しいマリア崇拜	5 57～64	マリア論
J・トマ	労働の神学	5 65～71	キリスト教的社会思想
H・キュンク	恩恵の問題とキリスト者再一致	5 72～78	マルティン・ルター
門脇佳吉	〈巻頭言〉経験の復権	6 1	巻頭言
N・ローフィンク	旧約聖書はどう解釈すべきか	6 2～9	聖書釈義学
H・ホルンシュタイン	聖書と伝承	6 10～16	聖書と伝承
P・トレンブレー	神の十戒	6 17～25	カテキズム
H・マッケーブ	神の民	6 26～33	教会論一般
W・リワク	キリストとキリスト者の支配 —黙示録にみる—	6 34～39	黙示録
P・フランセン	教理神学の三つの道	6 40～45	教義
H・リードマッタン	戦争と平和	6 46～51	現代世界憲章
J・ラウシュ	無抵抗主義と敵への愛	6 52～58	マタイ
J・ヌーナン	避妊	6 59～65	性倫理
L・モンダン	奇跡のキリスト教的意味	6 66～71	奇跡
B・ヘーリング	忘れ去られた兄弟愛	6 72～79	司牧
福島禎一	〈巻頭言〉もっと人間味を	7 1	巻頭言
E・リドー	サルトルのヒューマニズムとキリスト教	7 2～11	神学的エッセイ
K・ラーナー	キリスト教的ヒューマニズムとマルクス主義的ヒューマニズム	7 12～17	神学的人間論
E・パン	使徒的修道会と社会文化的変化	7 18～25	修道生活
フランス調査報告	労働者への宣教	7 26～30	司牧
H・ド・リュバック	すばらしき母「教会」	7 31～38	教会論一般
B・ヘーリング	道徳生活の新しさ	7 39～45	倫理神学一般
J・フックス	罪と改心	7 46～53	罪
J・カトワール	教会と再婚	7 54～59	婚姻
J・ムールー	信仰における理性の役割	7 60～64	信仰生活
P・グルロー	キリストの秘義“死”	7 65～72	キリスト論
L・ボロス	苦しみと死	7 73～80	神学的人間論
林省吾	〈巻頭言〉対話	8 1	巻頭言
P・ショーネンベルク	聖体におけるキリストの現存とは	8 2～10	聖体
T・マートン	降誕のよき知らせ —修道者の立場からの読み方—	8 11～17	神学的エッセイ
P・ビヤール	聖書における清貧	8 18～25	新約聖書神学
F・ムスナー	史実のイエズスと信仰のキリスト	8 26～33	キリスト論
H・スミス	現代人に典礼は意味があるか	8 34～39	典礼一般
D・アムリーヌ	キリスト教的価値と世俗的価値	8 40～48	倫理神学一般

H・U・v・バルタザール	福音的生活	8 49～55	修道生活
J・B・メッツ	創造的態度としての希望	8 56～63	終末論
L・ボロス	摂理について	8 64～67	神学的エッセイ
B・ヘーリング	変動する倫理神学	8 68～75	倫理神学一般
J・フィルハウス	〈巻頭言〉神学と歴史	9 1	巻頭言
J・クレーマー	キリストの復活の証言	9 2～7	復活
M・ブレンドレ	初代教会の復活信仰	9 8～14	復活
J・ダニエル	非神話化をどう考えるか	9 15～18	新約聖書神学
A・ミシェル	原罪と人類の起源	9 19～28	原罪
B・ヘーリング	キリスト者の成熟とは何か	9 29～32	信仰生活
R・マッケンジー	聖書神学とはなにか	9 33～40	聖書神学一般
J・マッケンジー	神感の社会的性格	9 41～47	聖書神学一般
R・マルレ	世俗都市	9 48～55	セキュラリズム
I・レウイス(ルイス)	子どもの告解の秘跡	9 56～62	ゆるし
R・ローランタン	マリアとキリスト教的な女性観	9 63～71	マリア論
C・ムーニー	テイヤール・ド・シャルダンとキリスト論	9 72～80	テイヤール・ド・シャルダン
I・カニャーダ	〈巻頭言〉神	10 1	巻頭言
R・マルレ	新約聖書の非神話化理論について	10 2～9	新約聖書神学
R・E・ブラウン	ヨハネ福音書はどのようにしてできたか	10 10～17	ヨハネ
M・ノバク	祈りは「おねだり」か	10 18～21	祈り
E・パン	都市の小教区	10 22～29	司牧
E・グートベンガー	聖体の現存の秘義	10 30～37	聖体
W・カスパー	教義の歴史性	10 38～45	教義
W・カスパー	教義と福音	10 46～48	教義
F・クロウ	教義の発展 —キリスト教一致の助けとなるか—	10 49～56	エキュメニズム
J・マッケンジー	人の子は苦しまなければならない	10 57～63	受難
D・マッカーフィー	自殺《その神学的考察》	10 64～68	生命倫理
J・アルファロ	ペルソナと神の恵み	10 69～75	三位一体論
K・ラーナー	無信仰者に信仰を説くには	10 76～80	カテキズム
古谷功	〈巻頭言〉聖書補助学の再評価	11 1	巻頭言
K・ラーナー	刷新する教会	11 2～7	教会論一般
L・ヘードル	神の教会と対話	11 8～15	教会論一般
J・ダニエル	科学者と信仰者	11 16～19	自然科学と神学
C・ムーニー	歴史に流れる霊性	11 20～26	霊性神学
H・ド・リュバック	あすの聖人	11 35～38	聖人
J・ナポーヌ	ヨハネ福音書の主題	11 39～45	ヨハネ
A・ジョルジュ	ルカ福音書における「神の子」	11 46～51	ルカ
F・ヘイグ	聖書のヒューマニズム	11 52～54	神学的エッセイ
J・マッケンジー	新約における律法	11 57～60	新約聖書神学
D・マッカーシー	イスラエルは私の長子	11 61～68	旧約聖書神学
P・グルロ	〈原罪〉を信すべきか	11 69～77	原罪
編集委員	〈巻頭言〉公会議後まる三年を経て	12 1	巻頭言
カナダ司教団	フマネ・ヴィテをめぐる	12 2	回勅

総目録

イギリス司教団	フマネ・ヴィテをめぐる	12 3	回勅
K・ラーナー	産児調節の回章《その波紋と課題》	12 4～9	回勅
J・ゴルトブルンナー	信仰と深層心理学	12 10～16	信仰生活
T・マルテンス	現代人と典礼	12 17～26	典礼一般
Y・コンガール	一致を求める祈りの神学	12 27～31	祈り
R・ラトゥレル	聖性は啓示のしるし	12 32～39	啓示
J・マックオーリー	神をどのように考えたらよいか	12 40～47	神概念
R・コムストック	『神の死』以後の神学	12 48～56	神概念
R・ヘブルスウェイト	ジョン・ロビンソンの思想	12 57～62	神学的エッセイ
J・デュポン	イエスの受けた試み	12 63～69	新約聖書神学
H・シュールマン	イエスの幼年物語は歴史か —ルカ1～2章の前史の構造・特色・歴史的価値—	12 70～76	ルカ
佐久間彪	〈巻頭言〉思而不学則殆	13 1	巻頭言
J・ベッツ	過越の神秘	13 2～11	新約聖書神学
ドイツ司教団	「イエスは復活した」	13 12～15	復活
A・ヴァノア	共観福音書が語る受難	13 16～21	受難
R・E・ブラウン	第四福音書のパラクリトス	13 22～27	ヨハネ
P・アンシオー	性と婚約	13 28～31	性倫理
H・ド・リュバック	人間像の理解へ	13 32～35	神学的人間論
J・マレー	教会の権威と自由	13 36～44	教会論一般
F・ヴルフ	司祭・修道者・信徒	13 45～47	教会論一般
J・ギトン	あすの司祭像	13 48～51	司祭職
J・バーンズ	説教きのうきょう	13 52～57	司牧
R・ディディエ	サタンとは《その神学的考察》	13 58～64	悪魔
L・A・シェーケル	言語学と文学からみた聖書釈義学	13 65～71	聖書釈義学
K・ラーナー	聖体訪問のすすめ	13 72～77	聖体
K・ヴァルケンホルスト	〈巻頭言〉心を信じる	14 1	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの復活と史的批判	14 2～11	復活
S・リヨネ	死と復活によるあがない	14 12～16	復活
R・マレー	信仰を失うとは	14 17～22	信仰生活
G・ランブ	世俗化とは —新約聖書と初代教会に探る—	14 23～29	セキュラリズム
K・ラーナー	神への愛と隣人愛	14 30～39	信仰生活
J・C・マレー	修道誓願にまつわる弊害	14 40～45	修道生活
O・ゼンメルロート	聖体祭儀と内省	14 46～50	典礼神学
B・ドレイア	イエスの奇跡の宣教	14 51～56	奇跡
D・マッカーシー	神の言葉と文学的装飾	14 57～62	聖書釈義学
B・デ・ピント	言葉の神秘性	14 63～68	神学的エッセイ
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈1〉 —クルマンとブルトマン—	14 69～78	キリスト論
安田貞治	〈巻頭言〉宣教者と神学	15 1	巻頭言
H・U・v・バルタザール	貧しき者の信仰	15 2～13	信仰
スイス司教団	だれでも平和のために尽くせる	15 14	エッセイ
B・ヘーリング	福音の革命 —暴力か非暴力か—	15 15～23	キリスト教的社会思想
C・スピック	神の前での人格的決断	15 24～30	倫理神学一般
H・シュールマン	イエスを囲む生活	15 31～39	修道生活

K・ラーナー	公会議後の神学と教導職	15 40～49	教導職
G=M・ニツシム	告解の共同祭儀	15 50～56	ゆるし
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈2〉 —クルマン説の批判—	15 57～63	キリスト論
R・グアルディーニ	パラダイスとは	15 64～68	終末論
A・ヴァネステ	原罪の神学と子どもの洗礼	15 69～77	原罪
J=S・アリエタ	〈巻頭言〉神学における〈霊の識別〉	16 1	巻頭言
K・ラーナー	無神論者もキリスト者たりうるか	16 2～12	無神論
J・—B・コバーン	信仰の疑い	16 13	信仰
L・エヴェリー	現代人は信仰しうるか	16 14～17	信仰
R・ガロディ	キリスト教とマルクス主義者の対話 —マルクス主義の立場から—	16 18～25	キリスト教とマルクス主義
J・B・メッツ	キリスト者とマルクス主義者の対話 —キリスト者の立場から—	16 26～31	キリスト教とマルクス主義
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第一回〉	16 32～36	教会論一般
B・マッグラス	ミドラシュとは何か	16 46～51	ユダヤ教
A・ダレス	象徴・神話・聖書の啓示	16 52～60	神話
R・トウッチ	プロテスタント教会との再一致	16 61～67	エキュメニズム
B・クラウス	洗礼の歴史	16 68～76	洗礼
沢田和夫	〈巻頭言〉苦しい娑婆を陽気に	17 1	巻頭言
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第二回〉	17 2～13	教会論一般
B・シュラー	教会の教導職も誤りうるか	17 14～22	教導職
A・ブシャー	未来の宣教者	17 23～25	福音宣教
H・ヌーウェン	新しい時代の司牧者	17 26～35	司祭職
A・グリーリー	司祭はどのような指導者か	17 36～42	司祭職
J・ラッツィンガー	聖書の人間観	17 43～51	神学的人間論
F・デュルウェル	聖書におけるキリストとの出会い	17 52～57	信仰生活
G・ディークマン	典礼と個人的信心	17 58～64	典礼一般
F・ルパルニユール	キリスト者にとって病気とはなにか	17 65～71	信仰生活
H・ブイヤール	キリスト教倫理と一般倫理	17 72～77	倫理神学一般
土屋吉正	〈巻頭言〉信仰に生きる	18 1～2	巻頭言
J・ティヤール	聖体における聖霊の働き	18 4～8	聖体
I・de ラ・ポトリ	わたしは道・真理・生命である	18 9～17	ヨハネ
D・ベルトラン	イエスは地獄について何を語ったか	18 18～25	終末論
P・フイツィング	自然法と教会	18 26～29	教会法
W・ブルクハルト	真理と教会の自由	18 30～37	教会論一般
H・ミュラー	ルターの十字架の黙想	18 38～46	マルティン・ルター
R・レドモンド	幼児洗礼 —歴史と司牧的問題—	18 47～53	洗礼
M・ロンデ	修道生活はどうなるか	18 54～57	修道生活
A・ドンデーヌ	世俗化と信仰	18 58～67	セキュラリズム
A・ブルンナー	労働の聖化	18 68～77	キリスト教的社会思想
市川裕	〈巻頭言〉司牧者	19 2～3	巻頭言
K・ラーナー	秘跡としての結婚	19 4～11	婚姻
J・ラッツィンガー	結婚の神学	19 12～22	婚姻
R・グアルディーニ	性の乱れ	19 23～27	性倫理
M・ベレー	此岸と彼岸	19 28～35	終末論

『リゴリアン』誌	民衆の抗議と市民の不服従	19 36～40	キリスト教的社会思想
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	発展と衰微	19 41	教会論一般
J・ーF・ガレン	女性と霊性	19 42～49	霊性神学
J・パートネス	苦しみの積極的意味	19 50～55	信仰生活
Y・コンガール	人間 —この呼ばれている存在—	19 56～60	神学的人間論
I・ベック	神の民の祭司職	19 61～67	信徒使徒職
X・レオン・デュフル	聖書学者に期待されるもの	19 68～77	聖書釈義学
井上洋治	〈巻頭言〉未来の《日本の神学》への期待	20 2～7	巻頭言
B・ロナガン	神学と人間の未来	20 8～17	ロナガン
G・ボウム	二千年代の教会はどうなる？ —教会は一つの社会ではなく、動きである—	20 18～25	教会論一般
R・マクブライエン	エキュメニズムのゆくえ	20 26～32	エキュメニズム
Y・モルトマン	福音の新しい解釈をめざして	20 33～37	新約聖書神学
J・ーW・グレーザー	大罪によって恩恵はなくなるか	20 38～41	罪
G・フォーラー	旧約聖書の中心点は何か	20 42～48	旧約聖書神学
P・シムソン	「神の都」のドラマ —ルカ福音書のエルサレム物語—	20 49～58	ルカ
D・ミラー	なぜ神は人となったか	20 59～67	ヘブライ書
K・ラーナー	待降節の訪れ	20 68～72	神学的エッセイ
J=L・モレイ	〈巻頭言〉性の人間化	21 2～3	巻頭言
C・ムーニー	現代世界憲章と神学の未来	21 4～14	現代世界憲章
A・ブレ	独身生活の情緒的欠陥はどう補われるか	21 15～23	修道生活
A・プレ	人間の性行為	21 24～25	性倫理
M・ジョイス	貞潔は性の自由をもたらすか	21 26～31	修道生活
J・ギエ	イエス・キリストの純潔	21 32～41	キリスト論
L・ボーステン	聖書のしおり(1)正しい祈りとは	21 41	信仰生活
M・マサール	福音の宣教は今日でも意味があるか	21 42～47	福音宣教
G・クヴァール	聖書と聖伝	21 48～57	聖書と伝承
K・ラーナー	復活祭の喜び	21 58～63	神学的エッセイ
I・de ラ・ポトリ	人の子は上げられる	21 64～73	キリスト論
M・ディベリウス	初めに永遠のみことばがあった	21 74～76	ヨハネ
L・アルンプルスター	〈巻頭言〉修道生活のゆくえ	22 2～5	巻頭言
A・ラーキン	修道生活に関する聖書的・神学的側面	22 6～18	修道生活
D・ベルトラン	完全さは修道者の専売特許か	22 19～25	修道生活
R・ヴォワイヨーム	現代人と観想	22 26～33	信仰生活
F・ヘングスバハ	教会内での信徒の位置	22 34～40	教会論一般
『キャソリック・マインド』	教会の共同責任性	22 41～43	教会論一般
F・バクレイ	共同典礼参加の原則	22 44～54	典礼神学
P・テイヤール・ド・シャルダン	諸宗教の合流	22 55～61	諸宗教の神学
H・コックス	信仰の新たな可能性	22 62～69	信仰
L・ボーステン	聖書のしおり(2)是非すべからず	22 70～71	信仰生活
K・ラーナー	生ける死者の日に	22 72～77	神学的エッセイ
薄田昇	〈巻頭言〉骨より肉を	23 2～3	巻頭言
R・シュールマン	道の大家、マイスター・エックハルト	23 4～12	中世思想
M・エックハルト	みことばを宣べ伝えなさい	23 13～16	原典資料

B・フレニョ・ジュリアン	三位一体の神秘	23 17～25	三位一体論
H・ド・リュバック	危機の渦中にある教会	23 26～36	教会論一般
Y・コンガール	宣教の必要性	23 37～43	福音宣教
L・ボーステン	聖書のしおり〈3〉信じること	23 44～45	信仰生活
P・ド・シュルジ	福音と暴力	23 46～56	新約聖書神学
A・フォンセカ	ガンジーと非暴力	23 57～60	エッセイ
G・バウムバハ	イエスとファリサイ人	23 61～69	キリスト論
X・レオン・デュフル	復活したイエスの現存	23 70～78	復活
濱尾文郎	〈巻頭言〉神の教会	24 2～3	巻頭言
M・レーラー	討論資料として —キュンク著『質問—誤りえないか』評—	24 4～13	教導職
K・ラーナー	ハンス・キュング批判	24 14～20	教導職
K・ラーナー	カトリック神学における不可謬性	24 21～27	教導職
ドイツ司教団	啓示と教義と信仰	24 28～29	教導職
H・キュンク	なぜ私は教会にとどまっているか	24 30～35	教導職
L・ボーステン	聖書のしおり〈4〉私にとってキリストとはだれか	24 36～37	信仰生活
J・ボレマン	ルカ福音のカテケシスにおける聖霊	24 38～48	ルカ
H・シュリーア	時の終わり	24 49～56	終末論
C・ベルナル	召命の理念	24 57～68	召命
G・—M・ベラー	エレミヤの召命の危機	24 69～78	エレミヤ
林省吾	〈巻頭言〉経験	25 2～3	巻頭言
W・ライヒ／L・ファーラー	無効な婚姻をいやす道	25 4～16	婚姻
C・デュコク	今日の結婚	25 17～25	婚姻
W・バセット	離婚と再婚	25 26～35	婚姻
L・ボーステン	聖書のしおり〈5〉復活	25 36～37	信仰生活
E・スキレベークス	キリスト教の死生観	25 38～41	終末論
J・オニール	イエスの沈黙	25 42～46	キリスト論
H・U・v・バルタザール	なぜ私はキリスト者なのか	25 47～52	信仰
J・ラッツィンガー	なぜ私は教会にとどまるのか	25 53～57	信仰
J・ラッツィンガー	司祭の役務	25 58～63	司祭職
K・ラーナー	主の現れ	25 64～69	神学的エッセイ
J・カファレナ	神概念の吟味	25 70～77	神概念
柳瀬睦男	〈巻頭言〉学問・言語・神	26 2～3	巻頭言
B・ロナガン	現代こそ信頼が	26 4～13	ロナガン
K・リーゼンフーバー	キリスト論の基礎的考察 —ラーナーのキリスト論—	26 14～21	キリスト論
K・ラーナー	キリストの心	26 22～26	神学的エッセイ
Y・コンガール	告解の秘跡に関する教えと司牧	26 27～37	ゆるし
P・リガ	告解とミサ	26 38～44	ゆるし
M・テュリアン	新しい奉献文の神学	26 45～58	典礼神学
W・カスパー	現代における神体験の可能性	26 59～71	神体験
L・ボーステン	聖書のしおり〈6〉不正なマンモン	26 72～73	信仰生活
P・ショーネンベルク	啓示と経験	26 74～80	啓示
I・マルティニーニ	〈巻頭言〉無題	27 2～4	巻頭言
E・シャラート	なぜ司祭職を放棄するのか	27 6～22	司祭職

H・シュリーア	新約聖書における司祭職	27 23～30	司祭職
M・ファン・カスター	激動する現代世界の司祭	27 31～45	司祭職
S・リヨネ	新約聖書と原罪	27 46～52	原罪
D・スタンリー	救いといやし	27 53～65	奇跡
E・リドー	テイヤール・ド・シャルダンによる「性」	27 66～76	テイヤール・ド・シャルダン
奥村一郎	〈巻頭言〉ゼロの視点	28 2～3	巻頭言
K・ラーナー	キリスト教の新しい基本的信条	28 4～14	教義
K・ラーナー	現代世界観におけるキリスト論	28 15～23	キリスト論
J・カファレナ	現代のキリスト教	28 24～31	信仰
R・マルレ	解釈学とカテキシス	28 32～36	カテキズム
J・ラッツィンガー	信仰のキリストとユーカリスト	28 37	神学的エッセイ
M・ファン・カスター	イエス・キリストへの信仰	28 38～46	信仰
J・モワン	歴史的確実性と信仰	28 47～58	信仰
聖公会／カトリック委員会	ユーカリストの教理についての合意声明	28 60～66	聖体
聖公会／カトリック委員会	合意声明とキリスト教的一致	28 67～70	エキュメニズム
A・ライダー／B・バイロン	合意声明をめぐって —解説と論評—	28 71～78	エキュメニズム
瀬戸勝介	〈巻頭言〉たゆみない祈り	29 2～3	巻頭言
K・ラーナー	祈りについて	29 4～14	祈り
P・ホッキン	祈りの分かち合い	29 15～23	祈り
J・マッケンジー	救いの意味	29 24～32	救済論
F・ヴルフ	われわれの真ん中に立つイエス・キリスト	29 33～38	キリスト論
X・レオン・デュフル	聖書解釈学者と歴史的出来事	29 39～47	聖書釈義学
M・ケール	教会にいる喜び	29 48～55	教会論一般
A・G・モリナ	教会の世論はやかましいドラか	29 56～63	教導職
E・スキレベークス	新しい司祭像の神学的考察	29 64～73	司祭職
J・カファレナ	イエス・キリスト —真の人・真の神—	29 74～80	キリスト論
K・ライフ	〈巻頭言〉ペンテコステより離散教会へ	30 2～3	巻頭言
堀田雄康	ヨハネの「ロゴス」とパウロの「神の像」	30 4～19	キリスト論
J・ラッツィンガー	実体変化をめぐって —聖体の意味を問う—	30 32～39	聖体
F・シュタインメッツ	ふさわしい主の晩餐とは	30 40～42	聖体
E・ダスマン	「キリストの体—アーメン」	30 43～47	聖体
J・カファレナ	信仰について	30 48～55	信仰
宋 正孝	みことばの随想	30 56～58	エッセイ
A・ダレス	宣教神学の動向	30 60～70	福音宣教
A・ダレス	啓示の考え方とその変遷	30 71～79	啓示
杉田稔	〈巻頭言〉ミシェル・クオストに倣っての祈り	31 2～3	巻頭言
B・ヘーリング	世俗化時代の祈り	31 4～12	祈り
J・カファレナ	〈続〉信仰について	31 13～15	信仰
H・シュリーア	ヨハネ福音書におけるキリスト論	31 16～27	ヨハネ
R・ヴァイヤー	「聖書のみ」か	31 28～37	マルティン・ルター
J・クイーン	新約聖書における奉仕職	31 38～47	司祭職
R・シュナッケンブルク	ペトロと他の使徒との関係	31 48～55	位階制
W・カスパー	教会における司祭の役割	31 56～67	司祭職

J・ラッツインガー	司祭職の意義	31	68～80	司祭職
A・マタイス	〈巻頭言〉愛の建設	32	2～3	巻頭言
N・ローフィンク	イスラエルとユダの一致	32	4～8	旧約聖書神学
W・ブルガー	教会一致の可能性	32	9～15	エキュメニズム
L・A・シェーケル	あがないは連帯性を表す	32	16～24	聖書神学一般
K・シェルクレ	新約聖書における報いと罰	32	25～30	罪
J・カファレナ	体験と表現	32	31～39	信仰
M・ケール	希望の物語 —クリスマスに—	32	40～43	神学的エッセイ
J・マッケンジー	インマヌエル	32	44～49	旧約聖書神学
P・ベルナディケー	ルカにおける喜びの神学	32	50～66	ルカ
R・シュルテ	神を父と呼ぶ	32	67	神学的エッセイ
D・ドース	アバ、父よ	32	68～74	キリスト論
O・ブルック	三位一体の影響	32	75～78	三位一体論
安井光雄	〈巻頭言〉神学と教会法学の対話	33	2～3	巻頭言
L・エルシ	教会における法	33	4～9	教会法
R・E・ブラウン	未熟さは婚姻障害となるか	33	10～15	教会法
P・パーマー	キリスト教的結婚	33	16～26	婚姻
J・レアル	イエスの母がいた	33	27～31	マリア論
J・ブライ	しるしと奇跡	33	32～39	奇跡
Z・アルセギ／M・フリック	原罪 —トレント公会議の真意—	33	40～51	原罪
L・ジョンストン	肉と霊	33	52～59	新約聖書神学
J・オルルク	ローマ書のピステイス	33	60～66	ローマ書
F・キーン	多様性の神学 —ラーナーの思想と修道生活—	33	67～80	諸宗教の神学
H・クルーゼ	〈巻頭言〉新しい司祭像をめぐる	34	2～4	巻頭言
パウロ六世	ラテン教会に修身助祭を復興させるための一般規則	34	5～12	助祭職
E・エクリン	助祭職の神学的領域	34	13～21	助祭職
J・リース	新約聖書における奉仕職のあり方 —終身助祭職の役割をめぐる—	34	22～29	助祭職
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	世界各地における助祭職の現状	34	30～38	助祭職
K・シャッツ	カリスマと相対性	34	39～43	聖霊
H・キュンク	神の言葉と霊のきずな	34	44～46	聖霊
J・ラッツインガー	神の民の指導者	34	47～53	司祭職
H・U・v・バルタザール	新約聖書における司祭像	34	54～60	司祭職
W・ヨーマンズ	信仰による祈り	34	61～68	信仰生活
X・レオン・デュフル	人間は死後どうなるか	34	69～80	終末論
中垣純	〈巻頭言〉福音宣教に思う	35	2～4	巻頭言
H・ミューレン	堅信の秘跡	35	5～13	堅信
A・ガーノーチ	感謝の祭儀	35	14～26	ミサ
H・マイヤー	回心の祭儀	35	27～31	ゆるし
P・パーマー	病者の塗油	35	32～41	病者の塗油
L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第一回〉	35	42～51	教会論一般
H・スミス	多忙な人の静寂の祈り	35	52～59	祈り
M・ニーデンタル	福音のアイロニーとは	35	60～68	新約聖書神学
K・シェルクレ	希望	35	69～79	終末論

J・ソレ	〈巻頭言〉神愛と隣人愛 —U・ルスに従って—	36 2~3	巻頭言
L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第二回〉	36 4~13	教会論一般
J・エレミアス	イエスの生涯と初代教会における祈り	36 14~23	典礼史
F・ハーン	新約聖書と初代教会にみる宣教	36 24~37	福音宣教
R・マルレ	現代人の信仰告白を試みて	36 38~48	教義
J・カファレナ	救い主	36 49~56	キリスト論
H・マンデルス	誰が典礼の主体か	36 57~62	典礼神学
P・グルロ	聖書への三つの問い	36 63~69	旧約聖書神学
J・ゲルハルト	教会基本法は必要か	36 70~79	教会法
A・G・エバンヘリスタ	〈巻頭言〉私の修道生活の意味	37 2~3	巻頭言
C・チェリアン	いま、私の目で神を見る —宗教体験の記録としての聖書—	37 4~13	神体験
W・コナリー	長所を生かす霊的指導	37 14~17	霊的指導
G・アシェンブレンナー	意識の糾明	37 18~27	イエズス会霊性
P・シュンゲル	イエスの死	37 28~35	キリスト論
Y・コンガール	働く聖霊	37 36~47	聖霊
N・アベヤシंगा	回心の秘跡と聖霊	37 48~54	ゆるし
H・キュンク	洗礼の完成としての堅信の秘跡	37 55~67	堅信
J・ウィナンディ	最後の審判の情景	37 68~79	終末論
T・オーボンク	〈巻頭言〉「心を込めて神を仰ぎ」	38 2~4	巻頭言
G・カールソン	死から命へ —霊的指導と過越の神秘—	38 5~15	霊的指導
J・ドミニアン	独身生活と共同体	38 16~23	修道生活
K・ラーナー	信仰の核心は生の中軸	38 24~33	信仰
P・ホッキン	キリスト者はどう祈るか	38 34~41	祈り
T・デュベイ	黙想の諸形質とその問題	38 42~53	祈り
J・リース	セレブレーションと宣教	38 54~61	福音宣教
G・ソレアス・プラグ	福音書は歴史的か	38 62~69	聖書釈義学
R・ペロディ	罪の意識と赦し	38 70~79	ゆるし
景山あき子	〈巻頭言〉聖霊とともに	39 2~3	巻頭言
W・ヘルプストリート	リジューのテレーズにおける〈とりなし〉と〈連帯〉	39 4~11	霊性一般
J・ギエ	イエスの死苦と人間	39 12~19	キリスト論
R・バウマン	イエスの復活とは何をいうのか	39 20~31	復活
K・ラーナー	復活信仰の霊性をめぐって	39 32~41	復活
J・カファレナ	キリストの神秘	39 42~49	キリスト論
D・ハスキン	啓示の継続	39 50~55	啓示
K・ラーナー	教会の使命は世界を人間らしくすることか	39 56~62	教会論一般
G・ラップ	宗教的多様性とその課題	39 63~67	諸宗教の神学
H・ラヴァレット	性と政治	39 68~80	倫理神学一般
白柳誠一	〈巻頭言〉適切な表現と提示方法	40 2~3	巻頭言
K・ラーナー	病者の自由 —その神学的考察—	40 8~18	生命倫理
C・サイクス	テイヤール・ド・シャルダンと宇宙的キリスト	40 19~25	テイヤール・ド・シャルダン
H・ヌーウェン	歓待のすすめ —ホスピタリティーとキリスト者—	40 26~29	司牧
B・エリソンド	聖書に学ぶ福音宣教	40 30~40	福音宣教
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈1〉	40 41~49	復活

総目録

L・サブラン	イエスの奇跡	40 50～58	奇跡
R・コスト	マルクス主義とキリスト者の生活	40 59～65	キリスト教とマルクス主義
J・マーティン	マタイにおける教会	40 66～74	教会論一般
山本襄治	〈巻頭言〉神学と司牧	41 2～3	巻頭言
G・ローフィンク	死後、何が到来するか	41 4～15	終末論
L・ケーシー	安楽死の倫理 —カレン・クインランの場合—	41 16～21	生命倫理
B・バトラー	新約聖書のマリア	41 22～31	マリア論
M・ーD・シュニユ	労働のキリスト教的意味	41 32～45	キリスト教的社会思想
J・フットレル	創立者のカリスマ発見	41 46～53	修道生活
A・ロツェッター	フランシスコの現代への示唆	41 54～59	霊性一般
J・ティヤール	変革が必要な修道生活	41 60～74	修道生活
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈2〉	41 75～78	復活
早副稔	〈巻頭言〉自らの信仰体験を整理して語れるものを持ちたい	42 2～3	巻頭言
J・ラッツインガー	洗礼と信仰および教会所属	42 4～17	洗礼
J・G・ソボサン	神秘主義の道	42 18～24	神秘主義
H・スタッファー	改宗者は霊的独自性を捨てるのか —アジアの伝統的宗教とカトリックとの関係—	42 25～30	諸宗教の神学
H＝J・クラウス	捕囚帰還後の律法理解	42 31～44	旧約聖書神学
C・P・マイヤー	神とその「可視性」 —神学における神体験と神認識について—	42 45～51	神概念
J・M・ロビラ	今日の〈赦しの秘跡〉	42 52～61	ゆるし
D・デイドベール／P・M・ベールネ	イエスはガリラヤにきた —マルコ1章21～45の解釈—	42 62～68	マルコ
J・デュポン	至福について	42 69～79	新約聖書神学
高柳俊一	〈巻頭言〉神学の未来？	43 2～3	巻頭言
Y・コンガール	教導職と神学者	43 4～11	教導職
J・カーモディ	カトリック神学の今後の課題	43 12～21	諸宗教の神学
西独カトリック教会会議	われわれの希望 —現代の信仰告白—	43 22～36	教会論一般
K・ヘンメルレ	宣教の火を消すな	43 37～41	福音宣教
W・カスパー	伝承と自由	43 42～46	聖書と伝承
M・ウォルシュ	聴けイスラエル(申命記 その1)	43 47～51	申命記
C・J・パイファー	刷新の青写真(申命記 その2)	43 52～57	申命記
L・ドゥーハン	イエスと祈り	43 58～63	祈り
D・ヒル	I ペトロ書における苦しみと洗礼	43 64～71	I ペトロ書
J・M・ティヤール	信仰に生きる修道者	43 72～80	修道生活
赤波江春海	〈巻頭言〉道—真理—命	44 2～3	巻頭言
P・アルペ	飢餓と福音宣教	44 4～15	福音宣教
W・カスパー	「神の子」の理解について	44 16～28	神の子
Y・ラガン	祈りの技術	44 29～35	祈り
P・G・ファン・ブレーメン	受容を受け入れる勇氣	44 36～40	信仰生活
K・ラーナー	熱狂と修道者	44 41～43	聖霊
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(1)	44 44～54	聖霊
J・アルファロ	死とキリスト教的希望	44 55～65	終末論
R・F・コリンズ	イエスとニコデモとの会話	44 66～73	新約聖書神学
I・de ラ・ポトリ	真理を行う	44 74～80	新約聖書神学
押田成人	〈巻頭言〉安物買いのぜに失い	45 2～3	巻頭言

Z・アルセギ	ゆるしの祭儀の刷新	45 4~10	ゆるし
J・モルトマン	三一的神の歴史	45 11~23	三位一体論
L・A・シケル	イヨブ記を戯曲的に読むために	45 24~35	ヨブ
P・ベルナディーク	ルカ福音書における旅行記の霊性	45 36~46	ルカ
K・シエルクレ	ヨハネス福音書における教会	45 47~53	ヨハネ
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(2)	45 54~62	聖霊
J・スードブラック	患難のうちにも誇る	45 63~71	信仰生活
J・M・カステリヨ	社会と霊的生活のずれ	45 72~79	霊性神学
渡辺和子	〈巻頭言〉「君は君、我は我なり、されど仲良き」	46 2~3	巻頭言
H・ミューレン	マリア論の新しい動向	46 4~11	マリア論
W・バイナート	今日のマリア崇敬	46 12~24	マリア論
C・フォカン	マルコス福音書における弟子たちの盲目性	46 25~29	マルコ
M・A・ゲッティ	ローマ書における使徒パウロス —今日の教会へのメッセージ—	46 30~36	ローマ書
F・ムスナー	「ガリラヤ危機」というものはあったか	46 37~46	キリスト論
J・ツィンク	門	46 47	エッセイ
J・ギエ	イエス・キリストの中になされた経験	46 48~54	キリスト論
V・コディナ	場末に息づく信仰	46 55~61	神学的エッセイ
H・ゲルツ	テロリズムの原因	46 62~64	キリスト教的社会思想
J・パスキエ	体験と回心	46 65~72	信仰生活
J・M・カステリヨ	新しい奉仕職の確立	46 73~78	教会論一般
三好迪	〈巻頭言〉聖書研究と教理神学	47 2~3	巻頭言
D・シニア	イエスとはだれか —現代キリスト論の課題—	47 4~15	キリスト論
W・ケルン	「共に食事すること」	47 16~23	キリスト論
G・ローフィンク	神学における「物語り」 —福音書の言語上の基本構造—	47 24~35	新約聖書神学
K・ラーナー	意味への問い —神の全き秘義に人生の意味を問う—	47 36~43	神学的エッセイ
K・ヘムメルレ	忙しさとクリスマス	47 44~46	エッセイ
N・ローフィンク	安息と余暇	47 47~58	旧約聖書神学
P・ヒューナーマン	イエスの力と無力	47 59~65	キリスト論
I・de ラ・ボトリ	イエスとサマリア人	47 66~79	ヨハネ
和田幹男	〈巻頭言〉日本のカトリック神学を考える	48 2~3	巻頭言
プエブラ司教会議	福音宣教	48 4~11	福音宣教
O・v・ネル・プロイニング	世界に対する教会の使命	48 12~25	教会論一般
S・ガリレア	解放の神学	48 26~48	解放の神学
R・ペッシュ	ペトロスによるメシア告白	48 49~56	マルコ
G・オーコリンズ	イエスは自らの死をどのように理解したか	48 57~68	キリスト論
U・ヴィルケンス	聖餐と教会一致	48 69~86	エキュメニズム
J・マクポリン	ルカとヨハネスにおける聖霊	48 87~104	聖霊
K・シェーファー	祈りの意味	48 105~112	祈り
池長潤	〈巻頭言〉源泉としての信仰体験	49 2~3	巻頭言
G・グレースハーケ	神の愛に召されている人間	49 4~24	三位一体論
O・H・ペッシュ	死と信仰	49 25~48	終末論
G・スヴィテク	共同体の霊動弁別	49 49~60	イエズス会霊性
R・ローランタン	「カリスマ」とは何か	49 61~71	聖霊

P・シュミッツ	良心 —危機に立たされる倫理規範—	49 72~85	倫理神学一般
J・ポイトラー	新約聖書による霊的指導	49 86~98	霊的指導
W・ヴォーゲルス	「構造分析」と司牧 —ザカイオスの物語—	49 99~112	聖書釈義学
白柳誠一	〈巻頭言〉真理に仕える使命	50 2~3	巻頭言
P・アルペ	〈巻頭言〉愛と正義	50 4~9	巻頭言
J・ピタウ	〈巻頭言〉日本への巡礼	50 10~11	巻頭言
越前喜六	〈巻頭言〉神学の日本化を目指して	50 12~13	巻頭言
M・トーレス=アルピ	〈巻頭言〉牧者なる主の声	50 14~16	巻頭言
熊沢義宣	エキュメニズムに関する二、三の考察	50 17~19	エキュメニズム
J・モルトマン	不安の時代におけるキリスト	50 20~34	終末論
P・ヒューナーマン	教会と聖職	50 35~49	位階制
R・ブーシェー	「明日の司教とは」	50 50~61	司教職
J・P・ハイル	マタイオス福音書における癒しの奇跡	50 62~77	マタイ
J・ボーツ／P・ド・フリース	霊的指導を与えるときの原則	50 78~79	霊的指導
J・ダルク	賛美のいけにえ	50 80~85	祈り
M・サイモン	礼拝のための空間づくり	50 86~98	司牧
山本襄治	〈巻頭言〉神学する心	51 2~3	巻頭言
K・ラーナー	「世界の教会」への飛躍	51 4~15	教会論一般
H・U・v・バルタザール	とらえがたきものに頼る	51 16~32	信仰
A・ジョルジュ	救い主の誕生 —ルカによる誕生物語の研究—	51 33~50	ルカ
D・バール	ドラマとしてのマタイオス福音書 —その構造と意図の再考察—	51 51~60	マタイ
C・ラッシュ／G・ルヴェーク／L・ヨハンネス	ヨハネス20章の構造	51 61~76	ヨハネ
J・ラムブレイト	共観福音書における〈たとえ話〉	51 77~92	新約聖書神学
J・ラッツィンガー	肉体の復活	51 93~109	終末論
粟本昭夫	〈巻頭言〉日本の教育とキリスト教神学	52 2~3	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(前半)	52 4~27	キリスト論
C・バンベルク	現代人と礼拝	52 28~41	典礼神学
L・A・シェーケル	回心の典礼—詩編50と51に見る	52 42~49	詩編
H・U・v・バルタザール	新約聖書から見た召命	52 50~60	召命
H・ロッター	救いと性の倫理	52 61~73	性倫理
G・オホマニー	秘跡・典礼の新しい理解—洗礼・ゆるし・病者の塗油の秘跡をめぐって	52 74~84	洗礼
M・T・ウィンスタンリー	弟子の道と孤独 —マルコス福音書を黙想して—	52 85~94	受難
K・ラーナー	イエスの復活	52 95~112	復活
赤木善光	〈巻頭言〉典礼への関心	53 2~4	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(後半)	53 5~24	キリスト論
T・キーティング	集中の祈り	53 25~33	祈り
E・ウッドワード	修道生活と憂鬱症	53 34~68	修道生活
H・U・v・バルタザール	少年の召命	53 69~71	召命
L・A・シェーケル	神の不在 —詩編42・43の詩的構造—	53 72~81	詩編
N・ローフィンク	「生めよ、ふえよ、地を従わせよ」?	53 82~100	旧約聖書神学
J・ホホワイトヘッド	「今の時をよく用いなさい」	53 101~103	信仰生活
P・スラルダース	創造	53 104~112	サクラメントウム・ムンディ
宇佐美公史	〈巻頭言〉波のはざままで	54 2~5	巻頭言

J・モルトマン	テレジアとルター	54 6～25	マルティン・ルター
P・ジェルヴェ	ゆるしの秘跡	54 26～45	ゆるし
W・ケルン	キリスト者は保守的か	54 46～61	キリスト論
M・A・シュヴァリエ	聖霊の降臨 —ルカスとヨハネスにおいて—	54 62～71	聖霊
K・ドノヴァン	典礼の逆説	54 72～78	典礼一般
G・マルク	カトリック教会の未来(一)	54 79～102	教会論一般
K・ラーナー	原罪	54 103～112	原罪
徳善義和	〈巻頭言〉賞讃と忘却のはざまのルター	55 2～4	巻頭言
K・ラーナー	霊の体験	55 5～23	神体験
M・スコット	預言者エリヤと神の出会い	55 24～29	修道生活
F・ロンバルディ	核エネルギーの倫理的次元	55 30～35	社会倫理
W・クラフト	マスターベーション・性の考察	55 36～45	性倫理
H・ワンズブラ	聖書における平和	55 46～53	聖書神学一般
G・オマホーニ	死後への不安と願望	55 54～62	終末論
S・M・シュナイダース	ヨハネス福音書と女性像	55 63～81	ヨハネ
G・マルク	カトリック教会の未来(二) —教会が直面する七つの挑戦—	55 82～99	教会論一般
K・ラーナー	あがない	55 100～112	sacramentum・ムンディ
沢田和夫	〈巻頭言〉一致志向の霊性	56 2～4	巻頭言
E・スキレバークス	核非武装論 —平和の福音を生きる—	56 5～16	信仰生活
F・ドレフェス	神のことばに仕える教会	56 17～28	聖書釈義学
F・ドレフェス	神のことばの現実化	56 29～42	聖書釈義学
R・ガスペリス	神のことばを祈る	56 43～54	聖書釈義学
W・ウォーカー	ヨハネスによる「主の祈り」?	56 54～66	新約聖書神学
H・ファイフェル	ホスピス —死は人間性の破壊か—	56 67～72	司牧
W・レーザー	ルター像の変遷	56 73～84	マルティン・ルター
J・ブロセーダー	新しい出会い〈カトリックのルター受容〉	56 85～94	マルティン・ルター
堀江節郎	新しい神学	56 95～96	神学的エッセイ
H・J・ポットマイヤー	信徒による司牧的奉仕	56 97～104	信徒使徒職
E・ニールマン	司祭	56 105～111	司祭職
百瀬文晃	〈巻頭言〉教会への奉仕としての神学	57 2～4	巻頭言
岩島忠彦	カール・ラーナー —人と思想—	57 5～14	カール・ラーナー
K・ラーナー	〈神秘〉概念の再吟味	57 15～41	基礎神学一般
K・ラーナー	三位一体に関する考察	57 42～60	三位一体論
K・ラーナー	イエスの人性について	57 61～72	キリスト論
J・B・メッツ	カール・ラーナー —ひとつの神学的生涯—	57 73～86	カール・ラーナー
K・ラーナー	日常に生きる永遠 —カール・ラーナー抜粋集—	57 87～114	カール・ラーナー
K・ラーナー	死	57 115～121	sacramentum・ムンディ
神学ダイジェスト編集室	カール・ラーナー主要文献リスト(邦語)	57 122～128	カール・ラーナー
森一弘	〈巻頭言〉よろこびのこだまとしての福音宣教	58 2～4	巻頭言
J・モルトマン	父なる神を信ず—神についての家父長的話法か、非家父長的話法か—	58 5～16	フェミニスト神学
J・ラッツィンガー	解放の神学批判	58 17～26	解放の神学
J・セグンド	解放の神学に見る二つの流れ	58 27～37	解放の神学
P・デーゼラース	民の癒し手、ヤーウェ —トビア書に見る聖書の救済論—	58 38～47	トビト記

J・フィッツ	モーセ、今求められる指導者像	58 48～50	神学的エッセイ
J・F・オグレイディ	主に愛された弟子	58 51～60	ヨハネ
C・E・カーン	規範的倫理から司牧的配慮へ	58 61～74	司牧
J・パリシ／R・クランフォード	脳死—生と死のはざま—	58 75～85	生命倫理
H・ロッター	教会法の枠組みと再婚の現実	58 86～94	婚姻
J・シュヴァルツ	聖座の外交関係	58 95～103	教皇庁関係
フュークリスター	過越し	58 104～112	サクラメントウム・ムンディ
橋口倫介	〈巻頭言〉福音の文化的受容への期待	59 2～4	巻頭言
A・ダレス	カトリシズムの本質 —プロテスタントとカトリックの観点をめぐって—	59 5～25	カトリシズム
W・カスパー	救いの普遍的秘跡たる教会	59 26～44	教会論一般
M・デュメ	信仰と文化との出会い	59 45～56	インカルチュレーション
J・R・ダナヒュー	平和の福音 —ルカ福音書釈義—	59 57～68	ルカ
W・ヴォーゲルス	ヨブの霊的成長	59 69～76	ヨブ
M・J・バックレー	弱さを身に負うがゆえに	59 77～83	司祭職
N・ローフィンク	世における正義と司祭職	59 84～98	司祭職
F・レンツェンダイス	福音書という文学	59 99～107	聖書釈義学
W・プロイニング	聖徒の交わり	59 108～112	サクラメントウム・ムンディ
犬飼道子	〈巻頭言〉信徒使徒職 —一、二の考察—	60 2～4	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの非暴力要求	60 5～23	マタイ
A・ニコラス	聖書の読み方と祈り	60 24～40	聖書神学一般
宇佐美公史	今日聖書をいかに読むか	60 41～50	聖書神学一般
C・マルティーニ	最初の弟子たち	60 51～55	祈り
M・P・ギアラガー	「教会離れ」と司牧の実践	60 56～65	司牧
E・A・ディードリック	典礼改革に見る聖体の秘跡	60 66～81	聖体
T・A・ケイン	精神療法 —心のいやし—	60 82～89	司牧
K・シューベルト	イエスの復活 —そのユダヤ教的観点—	60 90～101	復活
E・ニールマン	信徒	60 102～108	サクラメントウム・ムンディ
F・アリンゼ	〈巻頭言〉諸宗教との対話の可能性を求めて	61 2～6	巻頭言
K・シャッツ	公会議後の教会の危機	61 7～18	教会論一般
M・アマラドス	対話は宣教と両立するか	61 19～28	諸宗教の神学
P・ニッター	キリスト教は真にして絶対の宗教か	61 39～51	諸宗教の神学
S・ドゥクルー	修道生活における対神関係	61 52～62	修道生活
J・カヴァノー	資本主義文化とキリスト者	61 63～72	信仰生活
R・マッコーミック	「生かすべきか、死なすべきか」	61 73～83	生命倫理
J・オドネル	聖霊の神学 —イエスと霊—	61 84～103	聖霊
K・ラーナー	キリストの再臨	61 104～112	サクラメントウム・ムンディ
M・P・ギアラガー	〈巻頭言〉無神論の多様性を理解する	62 2～4	巻頭言
J・フィッツマイヤー	キリストの昇天と聖霊降臨	62 5～25	新約聖書神学
R・ロンマースキルヒ	最後の修道院	62 26～35	修道生活
F・F・クラヴェール	教会と革命	62 36～48	アジアの教会
R・プツァ	教会における再婚者の復権	62 49～56	婚姻
K・ケリー	良心の成熟を目指して	62 57～69	信仰生活
M・R・ソーズ	パウロの手紙における「神の義」	62 70～79	パウロ神学

P・D・ハンソン	旧約聖書における戦争と平和	62 80～99	旧約聖書神学
M・ゼックラー	啓蒙と啓示の相互依存	62 100～106	啓示
R・シュルテ	秘跡(1)	62 107～112	サクラメントウム・ムンディ
長島世津子	〈巻頭言〉教会と信徒の行方	63 2～5	巻頭言
R・E・ブラウン	聖書的な祭司職の要請	63 6～15	司祭職
C・デュコック	信仰の活動的な主体である信徒	63 16～25	信徒使徒職
H・J・クラウク	役職のない共同体—ヨハネ文書における教会の経験	63 26～48	教会論一般
G・キーレンケリイ	新約聖書における信徒の役割	63 49～57	信徒使徒職
S・J・エマヌエル	アジアの教会における信徒	63 58～72	アジアの教会
K・ラーナー	成熟したキリスト者とは	63 73～84	信仰生活
カルメル会	心の旅 —捕らわれの記録—	63 85～95	エッセイ
L・ギツリック	見えることと見えないこと	63 96～104	祈り
R・シュルテ	秘跡(2)	63 105～112	サクラメントウム・ムンディ
岸千年	〈巻頭言〉聖書を起点として	64 2～6	巻頭言
J・H・ライト	教会 —聖霊の共同体—	64 7～25	教会論一般
J・オコーリンズ	キリストの復活	64 26～32	復活
K・H・シェルクレ	実存的解釈における非神話化	64 33～43	聖書釈義学
F・リンチ	アナムカラ —一致の祈りと説教への招き—	64 44～54	祈り
N・ローフィンク	神の治療処置である修道会	64 55～67	修道生活
L・D・デイヴィス	この世の子らから学ぶ	64 68～76	エッセイ
A・ジョーンズ	イスラム教 —キリスト教への挑戦—	64 77～86	イスラム教
J・ダルリムプル	平和でなく剣を	64 87～94	福音宣教
J・ズートブラック	ベタニアの兄妹たち	64 95～103	祈り
H・フリース/J・フィンスタヘルツ	無謬性	64 104～112	サクラメントウム・ムンディ
野間順子	〈巻頭言・全世界に行って〉ブルキナ・ファソの兄弟と共に生きる	65 2～6	巻頭言
W・バイネールト	聖人 —キリストの救いの体現者—	65 7～22	聖人
R・E・ブラウン	現代における聖書と教義の関係	65 23～29	聖書釈義学
R・マーレイ	預言・政治・司祭職	65 30～43	司祭職
W・カスパー	世界における信徒の使命	65 44～58	信徒使徒職
A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅰ)	65 59～74	教会論一般
O・v・ネル・ブロイニング	制度化された不正とは何か	65 75～80	罪
I・カマーチョ	〈教会の社会教説〉を解釈するための四つの鍵	65 81～96	キリスト教的社会思想
H・グロース	「主は豊かなあがないに満ち」	65 97～105	旧約聖書神学
J・シュプレット	「肉体」と「靈魂」	65 106～111	サクラメントウム・ムンディ
A・フェークトトレ/I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅰ)	66 100～111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉現代に神を語る	66 2～5	巻頭言
J・ブエリエ	連帯する神の民	66 6～22	旧約聖書神学
金 壽煥(キム・スファン)	聖体大会にむけて	66 23～31	聖体
金 勝恵(キム・スンヘー)	解放とインカルチュレーション	66 32～39	インカルチュレーション
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅰ)	66 40～49	旧約聖書神学
T・E・クラーク	貧しい人々の側に立つ選択	66 50～59	キリスト教的社会思想
L・S・ケーヘル	山上の説教の倫理的な意味	66 60～69	倫理神学一般
A・ピエリス	解放の視点からみた霊性	66 70～82	霊性神学

A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅱ)	66 83~99	解放の神学
伊従直子	<巻頭言>「神の似姿」に創られ	67 2~4	巻頭言
H・S=シュトラウマン	母なる神 —ホセア11章に表れた神のイメージ—	67 5~20	ホセア
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅱ)	67 21~31	新約聖書神学
R・ブレナン	民衆の神学とは	67 32~40	民衆の神学
U・アダムス	社会の周辺から	67 41~55	祈り
N・グライナツハー	離婚と再婚の問題	67 56~65	婚姻
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅰ)	67 66~82	諸宗教の神学
P・ワーグドルフ	祈りの手引き	67 83~91	祈り
J・モルトマン	イエスと神の国	67 92~105	神の国
A・フェークトレノ/I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅱ)	67 106~112	サクラメントウム・ムンディ
雨宮慧	<巻頭言>求心的な動き	68 2~4	巻頭言
J・オウデンネル	司祭のアイデンティティと霊性	68 5~16	司祭職
R・ヒューブナー	初代教会における執事・長老・監督職の起源	68 17~35	位階制
M・ハルト	教皇制度と教会一致運動	68 36~50	教皇職
J・I・ゴンザレス・ファウス	ペトロの誘惑	68 51~61	祈り
S・パイナダス	真の解放 —観想と活動—	68 62~75	祈り
J・J・ギル	イメージの召命論	68 76~82	召命
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅱ)	68 83~95	諸宗教の神学
J・モルトマン	キリストの復活と世界の希望	68 96~106	復活
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅲ)	68 107~112	サクラメントウム・ムンディ
佐藤敬一	<巻頭言>神様に喜んでいただくために	69 2~5	巻頭言
P・H・コルベンバツハ	<巻頭言>二十五周年を祝って	69 6~7	巻頭言
田淵文男	<巻頭言>『神学ダイジェスト』の四半世紀と若干の具体案	69 8~10	巻頭言
J・B・メッツ	公会議 —「一つの手始めの手始め」?—	69 11~22	教会論一般
岩島忠彦	イエスの姿を求めて	69 23~41	キリスト論
P・M・ツォーレーナー	教会のヴィジョン	69 42~50	教会論一般
N・ギルメット	聖パウロと女性	69 51~63	パウロ神学
T・P・ローシュ	倫理の諸問題とエキュメニズム	69 64~69	エキュメニズム
R・グラムリッヒ	「不偏心」とイスラム教	69 70~77	イスラム教
M・サール	堅信を巡る現在の状況	69 78~90	堅信
R・マレー	霊的友情	69 91~105	霊性神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅳ)	69 106~112	サクラメントウム・ムンディ
鈴木宣明	<巻頭言>イグナティウスの霊性の歴史体験	70 2~5	巻頭言
A・デムステイエ	最初のイエズス会員たちと貧しい人々	70 6~17	イエズス会霊性
J・ソブリノ	『靈操』におけるキリスト	70 18~37	イエズス会霊性
M・ヘルヴィヒ	王たるキリストの招き	70 37~44	イエズス会霊性
E・クンツ	神の愛に動かされて —イグナチオの靈操の神学的諸観点とイエズス会員の行動様	70 45~61	イエズス会霊性
R・J・シュライター	二十一世紀に向かう宣教	70 62~72	福音宣教
A・ヴァイザー	病気をいやす賜物 —イエスと病人たち—	70 73~81	新約聖書神学
H・シュペーマン	イエスの受難	70 82~87	祈り
B・F・バット	眠っている神 —古代中近東の神話と聖書思想—	70 88~105	旧約聖書神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅴ)	70 106~112	サクラメントウム・ムンディ

岳野慶作	〈巻頭言〉『レーラム・ノヴァルム』発布百周年	71 2~5	巻頭言
R・M・サンス・デ・ディエゴ	教会の社会教説 —百年と二十五年—	71 6~19	キリスト教的社会思想
F・ルイス	十字架の聖ヨハネの霊性の主要側面	71 20~29	霊性一般
R・キナスト	生活の場で行う霊操	71 30~35	イエズス会霊性
S・クロイツァー	「母なる神」の再検討	71 36~44	旧約聖書神学
A・ハント	他宗教に救いはないのか? —諸宗教神学の可能性—	71 45~55	諸宗教の神学
K・ヘルツォーク	女性と戦争と平和	71 56~73	フェミニスト神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(1)	71 74~82	信仰生活
J・A・コールマン	世俗 —その社会学的考察—	71 83~90	セキュラリズム
D・E・メイヤー	修道院会計の見直し	71 91~95	修道生活
Q・R・コナーズ	修道者養成における危機の役割	71 96~101	修道生活
K・ラーナー	イエス・キリスト(VI)	71 102~112	サクラメントウム・ムンディ
緒方貞子	〈巻頭言〉難民の保護	72 2~3	巻頭言
M・E・ポアリング	物語としてのキリスト論 —マルコのキリスト理解—	72 4~24	マルコ
D・ランギス	喜び —その聖書的、教父的理解—	72 25~35	霊性一般
O・ケーラー	フランシスコ・ザビエル —使命感に燃えたイエズス会の個人主義者—	72 36~55	イエズス会霊性
E・ハンク	アウシュビッツ後のキリスト者	72 56~64	現代と神学
E・ショッケンホフ	人間の尊厳とその生物学的な自然本性	72 65~79	生命倫理
ブラザー・アンドルー	カリスマと委員会	72 80~82	福音宣教
L・A・シェーケル	「さからい」としての良心 —エレミヤ書からの聖書的考察—	72 83~92	旧約聖書神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(2)	72 93~101	信仰生活
P・ネメシエギ	人間の神学者(アンリ・ド・リュバク追悼)	72 102~105	エッセイ
J・J・プテンカラム	難民問題の解説 —私の存在の証明書—	72 106~111	エッセイ
小高毅	〈巻頭言〉無知と学知	73 2~4	巻頭言
J・アリソン	義化と意識の構造	73 5~19	パウロ神学
R・L・マドックス	実践的学びとしての神学の回復	73 20~41	実践神学一般
S・J・ダフィー	心の闇(I)—問い直される原罪—	73 42~56	原罪
S・グライナー	祈りは必ずかなえられるのか?	73 57~71	祈り
W・ヴォルベルト	他人の体に対する権利? —臓器移植の若干の問題について—	73 72~88	生命倫理
R・A・ヒル	霊的指導者の守秘義務	73 89~94	霊的指導
J・オーコンネル	愛の理論	73 95~103	霊性一般
J・B・メッツ	政治神学	73 104~111	サクラメントウム・ムンディ
長島正	〈巻頭言〉待望される地球・家族・共同体の神学	74 2~5	巻頭言
J・M・デ・メサ	キリストに従う道としての結婚	74 6~25	婚姻
P・A・ファウルクス	聖書における家庭のイメージ	74 26~36	婚姻
M・E・スカーフ	家庭の神話とモデル	74 37~49	婚姻
J・デュピュイ	キリスト論と諸宗教における救いの神学	74 50~61	諸宗教の神学
S・J・ダフィー	心の闇(II)—問い直される原罪—	74 62~76	原罪
C・M・マルティニーニ	聖書による祈り	74 77~85	祈り
S・ラヤン	地球は神のもの	74 86~102	エコロジー
J・ダーフト	家庭	74 103~111	サクラメントウム・ムンディ
野村純一	〈巻頭言〉福音宣教推進全国会議の神学	75 2~4	巻頭言
R・A・マッコーマック	二十一世紀に臨む倫理神学 —変動の中の伝統—	75 5~18	倫理神学一般

U・ルー	新カテキズム	75 19～28	カテキズム
M・レナ	テゼ	75 29～41	霊性一般
R・ホートン	忍耐の神学 —燃えつき症候群を越えて—	75 42～53	現代と神学
M・A・マクファースン・オリヴァー	夫婦の霊性	75 54～69	霊性一般
L・シューマン	召し出しの霊的識別 —イグナチオ・デ・ロヨラの霊操にもとづく方法—	75 70～83	イエズス会霊性
H・テシエ	イスラームから問われるキリスト者 —キリスト者によるイスラム理解—	75 84～103	イスラム教
K・ラーナー	神の普遍的救済意志	75 104～111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉神学的思惟の諸源泉	76 2～5	巻頭言
A・ダレス	教会論一般の半世紀	76 6～28	教会論一般
H・フリース	受容 —教会における真理発見への信徒の貢献—	76 29～45	教会論一般
A・ペーター	バルトロメ・デ・ラス・カサス —解放の神学における回心の類型—	76 46～58	解放の神学
G・A・アーバックル	民族性・多文化主義・文化的受肉	76 59～71	インカルチュレーション
M・アマラドス	解放 —諸宗教の協力をめざして—	76 72～93	諸宗教の神学
J・B・メッツ	カール・ラーナー追惜	76 94～99	エッセイ
K・ラーナー	—一九一九年、イエズス会修練院にて	76 100～101	エッセイ
K・ラーナー	神の民・教会所属	76 102～110	サクラメントウム・ムンディ
小田武彦	〈巻頭言〉分かち合いの前提となるもの	77 2～5	巻頭言
W・カスパー	聖書と伝統 —一つの聖霊論的展望—	77 6～34	聖書と伝承
K・H・ヴェーガー	現代の神証明の構造	77 35～44	基礎神学一般
W・キルヒシュレーガー	エウカリスチア —共同体の祝祭としての感謝の祭儀—	77 45～52	聖体
M・L・ブラン	霊的同伴の実践	77 53～59	霊的指導
W・ランベルト	「霊操を与える者」 —霊操における同伴者の役割—	77 60～71	イエズス会霊性
A・ピエリス	アジアのキリスト	77 72～85	アジアの神学
D・ミュレール	旅する者の祖国 —移住の倫理のために—	77 86～101	社会倫理
A・グリルマイアー	キリスト論	77 102～113	サクラメントウム・ムンディ
白柳誠一	〈巻頭言〉センスス・エクレンシエ	78 2～3	巻頭言
A・ダレス	『霊操』の教会規定	78 4～17	イエズス会霊性
P・レクリヴァン	改革者イグナチオ？ —『霊操』の教会規定の歴史的読解—	78 18～31	イエズス会霊性
J・G・ゲルハルツ	教会の感覚 —イグナチオ・デ・ロヨラの教会性—	78 32～45	イエズス会霊性
J・クレマー	イエスの根本願望 —イエスが本来望んだこと、今日も望んでいること—	78 46～65	キリスト論
M・ジュリアーニ	霊の動き	78 66～77	イエズス会霊性
E・コレット	ラーナー神学の哲学的基礎	78 78～90	カール・ラーナー
J・B・メッツ	カール・ラーナー —人間の神学的名誉のための闘い—	78 91～102	カール・ラーナー
K・ラーナー	神学	78 103～115	サクラメントウム・ムンディ
濱尾文郎	〈巻頭言〉「時のしるし」を読みとる	79 2～6	巻頭言
N・グライナツハー	新時代におけるカトリックの同一性	79 7～18	教会論一般
A・クノックアールト	カトリック教会カテキズム	79 19～33	カテキズム
E・ファイル	『新カテキズム』は信仰を正しく伝えうるか？	79 34～50	カテキズム
R・ヘイト	今日に伝えるイエス	79 51～74	キリスト論
J・W・オマリー	イグナチオは教会の改革者か？	79 75～92	イエズス会霊性
J・バーナーディン	司祭 —秘義の担い手・魂の医者—	79 93～103	司祭職
M・L・グーブラー	私は道・真理・命	79 104～113	新約聖書神学
K・ベルガー	聖書釈義学と組織神学	79 114～125	聖書釈義学

総目録

F・ケルスティエンス	希望	79	126～135	サクラメントウム・ムンディ
田邊董	〈巻頭言〉観想への招き	80	2～5	巻頭言
W・バイネルト	大学神学部と教会	80	6～24	神学教育
M・デルガド	岐路に立つヨーロッパ神学	80	25～38	インカルチュレーション
K・ブラーゼル	多文化的キリスト教・解放のための構想	80	39～55	インカルチュレーション
V・ティリマンナ	国家主権と人道的介入	80	56～71	社会倫理
E・グシキンデ	イエスとサマリア人 ―対話の範型―	80	72～77	福音宣教
J・W・オマリ―	ミッションと初期イエズス会員	80	78～86	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	霊操におけるスーパーバイザーとは	80	87～92	イエズス会霊性
J・R・サックス	イグナチオのミスティシズム	80	93～103	イエズス会霊性
K・ラーナー	教導職	80	104～117	サクラメントウム・ムンディ
徳善義和	〈巻頭言〉現代の教会への共通の問い ―ルター没後四五〇年に「九十五箇条」を読	81	2～6	巻頭言
M・ズイーヴェルニヒ	宣教の方向転換 ―宣教の歴史の実績と将来の課題―	81	7～21	福音宣教
M・ゼックラー	信教の自由と寛容	81	22～41	エキュメニズム
A・ピエリス	諸宗教間対話と諸宗教の神学 ―アジアのパラダイム―	81	42～51	諸宗教の神学
J・レーザ―	「ルターの年」とエキュメニズム	81	52～57	エキュメニズム
V・P・ファーニッシュ	パウロを位置づける ―よりよい理解に向けて―	81	58～68	パウロ神学
L・ボフ	解放の神学とエコロジー ―分立か互惠か?―	81	69～79	解放の神学
J・ライター	遺伝子治療と倫理	81	80～88	生命倫理
P=H・コルベンバッハ	イエズス会員の派遣と信徒との協力	81	89～95	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第二回》「第一週」の経験の中でのキリスト	81	96～102	イエズス会霊性
P・マインホルト	プロテスタンティズム	81	103～115	サクラメントウム・ムンディ
青木清	〈巻頭言〉科学と宗教の対話への期待	82	2～5	巻頭言
R・A・マッコーミック	回勅『いのちの福音』を読む	82	6～18	回勅
J・フックス	「いのちの福音」と死の文化	82	19～33	回勅
R・A・マッコーミック	正・不正から善・悪へ ―識別は倫理的問題に何を寄与するか―	82	34～48	倫理神学一般
N・グライナッハー	教化か、初歩要理教育か? ―『新カテキズム』についての意見―	82	49～63	カテキズム
R・ジベリーニ	エコロジーに関する神学論争	82	64～72	エコロジー
E・ツェンガー	我々の第一の契約 ―キリスト者にとっての旧約聖書の重要性―	82	73～88	旧約聖書神学
タブレット誌	アジアの神学者が異端者として宣告され破門された	82	89～94	バラスリヤ師関連
アーヘン・ミッシオ宣教学研究	バラスリヤ師の破門に関する声明書	82	95～96	バラスリヤ師関連
S・パイナダス	バラスリヤの事件	82	97～98	バラスリヤ師関連
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第三回》霊操「第一週」の終わりの霊操者の霊的状态	82	99～107	イエズス会霊性
M=J・ギュー	教会論一般	82	108～115	サクラメントウム・ムンディ
高橋重幸	〈巻頭言〉「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい」	83	2～6	巻頭言
R・マックダーモット	奉獻生活 ―起源二千年に向けての召命―	83	7～13	回勅
J・ズートブラック	イエスの弟子であることと修道生活	83	14～21	修道生活
M・ティッド	修練期の回想 ―二十世紀末の修練期を振り返って―	83	22～29	修道生活
M・アンチラ	教会公文書における修道者の従順	83	30～39	修道生活
A・ダレス	信仰の教會的次元	83	40～51	教会論一般
O=H・ペッシュ	トリエント公会議と今日のエキュメニカル対話 ―カトリックからの展望―	83	52～70	エキュメニズム
P・M・ツ―レーナー	再婚	83	71～84	婚姻
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第四回》霊操 ひとたび霊操が達成されると	83	85～89	イエズス会霊性

M=J・ギュー	教会	83 90~114	サクラメントウム・ムンディ
J・ネラン	〈巻頭言〉現代におけるキリスト論とは	84 2~5	巻頭言
R・ヘイト	イエスと世界の諸宗教	84 6~28	諸宗教の神学
P・C・ファン	イエス —アジア人の顔をした救い主—	84 29~56	キリスト論
J・マッカーシー	宇宙的キリストとエコロジー	84 57~65	キリスト論
A・ラフォ	ホアン・ルイス・セグンドの「神学の深みとしての霊性」	84 66~68	霊性神学
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	決定的な歩み —義化の教説に関するルーテル並びにカトリック教会の宣言—	84 69~81	エキュメニズム
T・ローシュ	明日の教会の司祭職	84 82~98	司祭職
K・ラーナー	恩恵	84 99~119	サクラメントウム・ムンディ
吉山登	〈巻頭言〉生命倫理と社会倫理のかかわり	85 2~8	巻頭言
教皇庁立生命アカデミー	ヒト・ゲノムの研究と倫理	85 9~15	生命倫理
E・D・ペレグリーノ	安楽死と介助自殺	85 16~31	生命倫理
C・クンマー	子宮外墮胎? —胚の生命の始まりを決定する際の実証的証拠—	85 32~38	生命倫理
D・ミート	「市場」と人間の尊厳の不可侵性 —生体臨床医学を例として—	85 39~46	生命倫理
S・ベヴァンズ	アジアにおけるインカルチュレーションの歩み —アジア司教協議会連盟の二十五年	85 47~66	インカルチュレーション
G・クラウス	普遍的な墮罪状態 —原罪概念に代わる類語—	85 67~75	原罪
N・ローフィンク	詩編とキリスト教の黙想 —詩編を理解するための最終編集の意義—	85 77~88	詩編
R・メネ	修辞分析 —聖書理解の新しい研究方法—	85 89~105	聖書釈義学
タブレット誌	バラスリア師破門の撤回	85 106	バラスリヤ師関連
M・シュマウス	聖霊	85 107~119	サクラメントウム・ムンディ
結城了悟	〈巻頭言〉上川島からの声と日本の殉教者	86 2~5	巻頭言
P・C・ファン	神の国 —アジアにとって神学的シンボルか?—	86 6~25	神の国
H・ヴァルデンフェルス	宗教における救いのイメージ	86 26~35	諸宗教の神学
金 壽煥(キム・スファン)	アジアへの宣教	86 36~44	福音宣教
K・ラーナー	キリスト教の絶対性の主張について	86 45~58	教義
G・オコリンズ	イエスのイメージ —呼称によるキリスト論の再活用—	86 59~79	キリスト論
J・M・カスティリョ	霊性に伴う「危険」	86 80~85	霊性神学
N・ローフィンク	貧しさについての三様の語り方 —詩編一〇九をヒントに—	86 86~102	詩編
K・ベルガー	救済史(一)	86 103~111	サクラメントウム・ムンディ
山本襄治	〈巻頭言〉二十一世紀に向かう教会	87 2~3	巻頭言
W・クラウスニツァー	ローマ・カトリック教会と教皇職	87 4~11	教導職
H・ヴァルデンフェルス	不謬性	87 12~23	教導職
P・ヒューナーマン	信仰を守るために? —教義学者の反問—	87 24~33	教義
L・エルシー	教会における公正と現代の法制度	87 34~45	教導職
H=J・サンダー	宗教の差異 —聖なるものの多元性における信仰—	87 46~62	諸宗教の神学
H・ヘーグスタド	ユダヤ人イエス —異邦人の救い主か、イスラエルのメシアか?—	87 63~71	キリスト論
E・ショッケンホフ	医学研究の必要性と限界	87 72~85	倫理神学一般
D・ビゾン	男性の霊性	87 86~95	霊性神学
M・ケール	栄光のうちに、主よ、あなたが来られるまで	87 96~101	終末論
F・A・サリバン	聖公会との対話に新たな障害	87 102~105	エキュメニズム
A・ダルラブ	救済史(二)	87 106~113	サクラメントウム・ムンディ
國井健宏	〈巻頭言〉新しい時代の新しい典礼?	88 2~4	巻頭言
W・パネンベルク	「義認の教義についての共同宣言」	88 6~9	エキュメニズム

総目録

E・ユンゲル	枢要な問題 —義認の教義についての共同宣言—	88 10~17	エキュメニズム
W・カスパー	教会一致への途上における里程標 —義認の教義についての共同宣言—	88 18~21	エキュメニズム
K・レーマン	どのような「コンセンサス」に到達したのか —義認の教義についての共同宣言—	88 22~28	エキュメニズム
F・クーン	司牧職間の協力 —はざまに漂いながら—	88 29~36	司牧
R・マッケンナ	教会の宣教使命 —G・バウム思想分析—	88 37~53	福音宣教
R・ウィークランド	地球規模化する世界、多文化の教会	88 54~67	教会論一般
J・H・マッケンナ	幼児洗礼の神学的考察	88 68~79	洗礼
P=H・コルベンバッハ	現代に挑戦するカトリック教育 —ポーランドでのイエズス会学校の課題—	88 80~86	イエズス会霊性
W・ベッケンフェルデ	ドイツ・カトリック教会の現状 —教会法学者の目から—	88 87~105	教会法
C・R・カバルス	意識の糾明	88 106~115	イエズス会霊性
柳瀬睦男	〈巻頭言〉自然にあらわれた神の栄光	89 2~3	巻頭言
G・コイン	宇宙 —自然科学の理解とその神学的意味—	89 4~11	自然科学と神学
R・コルターマン	進化現象における選択の意味と役割	89 12~20	自然科学と神学
J・モルトマン	霊の賜物とそのキリスト教的同一性	89 21~26	聖霊
T・F・オメアラ	ターザン、ラス・カサス、ラーナー —トマス・アクウイナスの拡大された恩恵の理論—	89 27~40	恩恵論
N・A・ダラヴェール	カトリック・フェミニスト神学を目指して	89 41~60	フェミニスト神学
E・フックス	倫理神学の半世紀	89 61~68	倫理神学一般
R・ノイデッカー	ラビ・ユダヤ教と福音書に見られる師弟関係	89 69~81	ユダヤ教
H・S=シュトラウマン	「罪は女から始まり…」(シラ書25章24節)	89 82~97	フェミニスト神学
C・R・カバルス	信徒のものであるイグナチオの霊性 —「イグナチオ的あり方」とは—	89 98~111	イエズス会霊性
岩島忠彦	〈巻頭言〉カトリック神学のゆくえ	90 2~3	巻頭言
教皇庁立生命アカデミー	ヒト胚性幹細胞の作成および科学的・治癒的用途に関する宣言	90 4~11	生命倫理
J・B・メッツ	神と時 —モデルネの境域における神学と形而上学—	90 12~28	基礎神学一般
A・ニコラス	キリスト教の脱西洋化 —不幸か、新たなチャンスか—	90 29~45	福音宣教
G・ポツカルスキー	東西教会の分断と再合同	90 46~62	エキュメニズム
L・ロース	芸術の象徴表現、文化、宗教的なもの	90 63~74	典礼一般
N・ローフィンク	貧しい人は地を継ぐ —詩編37と真福八端—	90 75~88	旧約聖書神学
C・M・マルティーニ	教皇ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼 —和解—	90 89~97	神学的エッセイ
『アメリカ』誌	教会における法の適正手続き	90 98~100	教導職
C・R・カバルス	現代社会における二つの霊の動き	90 101~116	霊性神学
J・モラー/A・サンド	人間(1)	90 117~125	サクラメントウム・ムンディ
越前喜六	〈巻頭言〉なぜ教会は学問に力をいれるべきか	91 2~4	巻頭言
W・カスパー	普遍教会と地方教会との関係	91 5~17	教会論一般
P・C・ファン	解放の神学の方法	91 18~39	解放の神学
H・クラマー	結婚、忠実、離婚エトスの変化	91 40~54	婚姻
J・ピタウ	キリスト教信仰とカトリック教育の四つのアイコン	91 55~60	神学的エッセイ
J・コモンチャク	「事件」としての第二バチカン公会議	91 61~84	教会論一般
W・フルスト	バーチャル・リアリティと秘跡	91 85~96	秘跡論一般
B・グロム	「エソテリック」の魅惑	91 97~109	神秘主義
D・J・フィッツパトリック	親としての霊性	91 110~115	霊性一般
K・ラーナー	人間(2)	91 116~123	サクラメントウム・ムンディ
朴憲郁	〈巻頭言〉二十一世紀とパウロの終末論的希望	92 2~4	巻頭言
O・ラッシュ	信仰のセンス —啓示理解の信仰—	92 5~31	啓示

G・メイシー	中世初期における女性の叙階	92 32～53	叙階
D・グッド	新約聖書と同性愛	92 54～71	同性愛神学
M・ウェレット	三位一体と主の晩餐 —契約の神秘—	92 72～93	三位一体
コンキリウム誌	米国同時多発テロ事件に対する宣言	92 94～97	社会倫理
N・ローフィンク	旧約聖書とキリスト者の日常生活	92 98～114	旧約聖書神学
H・M＝ケラー	ルカ福音書のマリア	92 115～130	ルカ
S・キーヒレ	私に従って十字架を	92 131～135	霊性一般
岡田武夫	〈巻頭言〉現代日本の教会のための神学的課題	93 2～3	巻頭言
J・ソブリノ	犠牲者によるグローバル化の贖い	93 4～20	解放の神学
E・ツェンガー	聖書の創造神学	93 21～40	旧約聖書神学
J・P・マイヤー	史的イエスとキリスト教奉仕職 —その歴史的つながりはあるか？—	93 41～62	キリスト論
E・T・グロツペ	イヴ・コンガールの聖霊の神学	93 63～84	聖霊
C＝T・ライ	アジアの神学における宗教間対話	93 85～94	諸宗教の神学
M・G・ローラー	変わりゆく結婚モデル	93 95～100	婚姻
C・ドーメン	神学が祈りにとりいれられるとき(詩編103)	93 101～111	詩編
B・ファイニンガー	学校での聖書教育	93 112～123	宗教教育
J・ラッツィンガー	地方教会と普遍教会	93 124～133	教会論一般
手塚奈々子	〈巻頭言〉教父と現代	94 2～3	巻頭言
J・モルトマン	神の義認	94 4～13	救済論
H＝J・レーリク	「神化」—救済論のエキュメニカルなキーワード—	94 14～34	救済論
P・ヘンリッヒ	原理主義とは何か	94 35～46	現代と神学
J＝L・マリオン	エマオへの道における霊的直観	94 47～57	現代と神学
E・ジョンソン	神の友、預言者であるマリア —マリア伝承の読み方—	94 58～71	マリア論
L＝M・ショーベ	終末論と秘跡	94 72～84	終末論
J・ノイナー	啓示の豊かさ —『ドミヌス・イエズス』についての考察—	94 85～93	啓示
S・フレイン	ガリラヤとエルサレム —ユダヤ復興の地理学的視点から—	94 94～112	新約聖書神学
教皇庁立生命アカデミー	クローニングに関する考察	94 113～121	生命倫理
小野寺功	〈巻頭言〉京都学派とキリスト教	95 2～4	巻頭言
W・カスパー	エキュメニズムの現状と将来	95 5～23	エキュメニズム
J・F・キーナン	倫理神学とその歴史	95 24～42	倫理神学一般
C・ベル	儀礼にまつわる歴史 —部族儀礼とカトリック儀礼—	95 43～59	典礼
J・ボイトラー	キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書 —教皇庁聖書委員会発表の新文書—	95 60～74	聖書神学一般
R・F・タフト	聖別のないミサ？	95 75～81	聖体
P・サガノ	女性助祭をめぐる議論の現況	95 82～89	叙階
M・アマラドス	平和のための宗教	95 90～95	アジアの神学
J・モルトマン	イエス・キリスト —犠牲者と行為者の世界における神の義—	95 96～114	救済論
T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(前編) —探し求めて出かける—	95 115～129	霊性神学
大貫 隆	〈巻頭言〉イエスの絶叫	96 2～3	巻頭言
神学ダイジェスト編集委員会	第二バチカン公会議四十周年 —A・ダレスとJ・オマリイの小論を読む—	96 4～22	教会論一般
L・S・ケイヒル	グローバルな倫理に向けて	96 23～45	倫理神学一般
J・P・マイヤー	死者の復活についての論争	96 46～65	新約聖書神学
E・M・ファーベル	一つの始まりである終わり —キリスト教から見たリインカルネーション—	96 66～84	終末論
D・J・シモン	スキレバークスの救済論 —終末的救いと社会的政治的解放—	96 85～113	終末論

総目録

T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(後編) —探し求めて出かける—	96 114~128	霊性神学
カトリック信者の諸権利協会	カトリック教会会憲(ARCC試案)	96 129~141	信仰生活
イオアン高橋保行	<巻頭言>現代とエキュメニズムと正教	97 2~4	巻頭言
C・スタモウリス	エキュメニズム的教会論と三位一体の交わり	97 5~17	エキュメニズム
J・Y・タン	アジア特別シノドス「提題解説」に対する日本とインドネシアの公式回答	97 18~34	アジアの教会
P・C・ファン	宗教上の多重帰属	97 36~57	アジアの神学
A・ピエリス	教会はアジア的すぎるか —N・タナーに就いて—	97 58~69	アジアの教会
E・ツェンガー	男と女として造られた人間 —創世記2~3章を読む—	97 71~76	創世記
J・マナス	セクシュアリティ、独身制、信仰の探求	97 77~92	婚姻
G・コールマン	同性結合と結婚	97 93~104	同性愛神学
J・セルヴェ	受肉におけるマリアの役割	97 106~123	マリア論
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (前編)	97 124~133	典礼史
稲垣 良典	<巻頭言>「神学すること」について考える	98 2~4	巻頭言
K・アンブレート	政治的問題としての—神論— —キリスト教的終末論から考える—	98 5~22	神概念
K・R・ハイメス	正戦と軍事介入	98 23~35	戦争
J・フレデリックス	カトリック教会と他宗教 —真実で尊いものを何も排除しない—	98 36~60	諸宗教の神学
T・シュナイダー	共同聖餐への道? —カトリック的視点からの検討—	98 61~82	エキュメニズム
S・ヘル	ルーテルとの共同聖餐 —見通しと限界、カトリックからの提言—	98 83~96	エキュメニズム
H・フランケメル	「聖書」神学とは? —意味論的・史的考察—	98 97~114	新約聖書神学
P=H・コルベンバツハ	霊操と協働者たち	98 115~121	霊的指導
R・ハメル、M・パニコラ	生命維持は義務か? —伝統的教説とその修正について—	98 122~131	生命倫理
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (後編)	98 132~143	典礼史
梶山 義夫	<巻頭言>職員室の中で近頃思うこと	99 2~5	巻頭言
S・ミーディマ、W・L・ウオーデツァ	ミッションスクールのアイデンティティーと生徒のアイデンティティー形成	99 6~19	宗教教育
T・H・グルーム	総合的信仰教育	99 20~30	宗教教育
F・C・ミュラー	修道会による学校への支援(スポンサーシップ) —カトリック学校の伝統を守るため—	99 31~50	宗教教育
C・ウーリングー	「塔のある町を建てよう…」	99 51~60	創世記
M・E・グラハム	人は何によって倫理的に善とされるか —J・フックスによる倫理的善と救いに関する	99 61~81	倫理神学一般
J・マツタム	恩恵の神学	99 82~97	恩恵論
G・アウグスティン	全体的(ホーリスティック)な霊性の土台としての創造信仰	99 98~114	霊性神学
E・クンツ	日常における神認識の場とは?	99 115~124	神体験
H・M・カスティーリョ	キリスト教の霊性の中心	99 125~135	霊性神学
佐久間 勤	<巻頭言>神学ダイジェスト100号記念によせて	100 2~4	巻頭言
光延 一郎	神学ダイジェスト100号に添えて	100 5~7	巻頭言
K・ラーナー	—カトリック神学者の経験—	100 8~23	カール・ラーナー
百瀬 文晃	カール・ラーナーの神学と日本	100 24~38	カール・ラーナー
K・レーマン	教会にとってのカール・ラーナーの意義	100 39~54	カール・ラーナー
K・P・フィッシャー	『教会の構造改革』再読	100 55~73	カール・ラーナー
C・ケッペラー	カール・ラーナー恩恵論の核心 —アンリ・ド・リュバックとの対比において—	100 74~96	カール・ラーナー
R・A・ジーベンロック	カール・ラーナー資料室での経験	100 97~109	カール・ラーナー
J・ソプリノ	ラテン・アメリカから見たカール・ラーナー	100 110~128	カール・ラーナー
P・エンディーン	英語圏におけるカール・ラーナー	100 129~150	カール・ラーナー
A・ラフェルト	カール・ラーナー研究のために	100 151~158	カール・ラーナー

総目録

濱尾 文郎	〈巻頭言〉第二バチカン公会議後の教会と現状の要望	101 2~7	巻頭言
J・W・オマリ	第二バチカン公会議 —伝統との非連続性—	101 8~34	第二バチカン公会議
A・ダレス	『教会憲章』の秘跡的教会論	101 35~49	教会憲章
H・フランケレ	『啓示憲章』の進歩と停滞	101 50~57	啓示憲章
J・マケヴォイ	『現代世界憲章』の意義	101 58~77	現代世界憲章
C・テオバルト	第二バチカン公会議文書の内的原則と今日的課題	101 78~101	第二バチカン公会議
F・A・サリバン	司教協議会に教導権はあるのか	101 102~121	教導職
P=H・コルベンバッハ	今日における霊操の教会規定 —公会議後の教会において考え、判断し、感じるため	101 122~131	イエズス会霊性
西山 俊彦	〈巻頭言〉至高の福音のささやかな理解と実現のために	102 2~7	2007 巻頭言
J・A・エストラーダ	現代の挑戦と教会の人間性回復	102 8~21	2007 霊性神学
A・ニコラス	アジアにおけるキリスト教の危機	102 22~30	2007 霊性神学
陳 南州	状況(コンテクスト)に根差した普遍性に向けて —台湾基督長老教会の神学と実践-	102 31~51	2007 霊性神学
J=Y・カルヴェ	社会使徒職とその霊性 —イエズス会の取り組み—	102 52~61	2007 イエズス会霊性
P・シェルドレイク	歴史の中の霊性 —社会的観点から—	102 62~74	2007 霊性神学
H・ケスラー	復活をどのように考えるのか?	102 75~84	2007 キリスト論
C・ヤンセン	政治的抵抗者としてのイエスの想起 —旅の途上のキリスト論(ルカ24章13~35節)-	102 85~92	2007 新約聖書神学
R・S・スギルタラージャ	多宗教社会における聖書解釈 —パウロの「回心」の再読を例に—	102 93~105	2007 聖書釈義学
C・M・マルティニ	B・ロナーガンの教会への奉仕について	102 106~120	2007 ロナガン
小田 武彦	日本におけるカトリック学校の課題	103 2~12	2007 巻頭言
F・ウィルフレッド	今日の大学における神学研究	103 13~22	2007 カトリック学校
J・R・コノリー	カトリック大学における神学	103 23~39	2007 カトリック学校
M・T・ハリナン	岐路に立つ米国のカトリック学校	103 40~63	2007 カトリック学校
J・J・ディジャコモ	カトリック学校への提言	103 64~70	2007 カトリック学校
A・ライダー	大バシレイオスの聖霊論	103 71~81	2007 聖霊
W・レーザー	ハンス・ウルス・フォン・バルタザールとそのイグナチオ的—教父的源泉	103 82~91	2007 バルタザール
S・v・アーブ	健康と医学の神学に向けて	103 92~101	2007 現代神学
M・ノイマン	霊的旅路での聖書の役割	103 102~111	2007 霊的指導
M・エーブナー	イエスの悪魔祓いをめぐる論争	103 112~119	2007 新約聖書神学
M・フランシス	トリエントのミサを認める自発教令	103 120~125	2007 回勅
竹内 修一	〈巻頭言〉いのちへの覚醒	104 2~5	2008 巻頭言
B・V・ジョンストン	カトリック倫理神学における伝統論	104 6~23	2008 生命倫理
J・F・キーナン	性と倫理神学をめぐる議論	104 24~40	2008 生命倫理
J・M・マクダーモット	『フマーネ・ヴィテ』再読	104 41~66	2008 生命倫理
T・A・サルズマン、M・G・ローラー	真に人間的な性における性的補完性	104 67~89	2008 生命倫理
J・シェッファー	環境倫理のための神学的枠組み	104 90~110	2008 環境倫理
J・F・キーナン	司祭の倫理的権利の構築を目指して	104 111~124	2008 司祭職
宮本 久雄	〈巻頭言〉ナザレのイエス	105 2~6	2008 巻頭言
W・レーザー	『ナザレのイエス』への十二の手引き	105 8~25	2008 回勅
T・ゼーディング	—聖書学者の応答	105 26~37	2008 回勅
P・スタインフェルズ	神の御顔たるイエス	105 38~42	2008 回勅
T・W・ティレイ	新たなイエス研究 —史的イエスでなく、歴史上のイエスを—	105 43~69	2008 新約聖書神学
D・ベラー	シオンの娘マリア —聖書の中のイエスの母—	105 70~82	2008 マリア論
K・レーマン	「キリストの教会はカトリック教会の中に存在する」 —『教会憲章』第8項をめぐるカト	105 83~95	2008 教会論

M・カイザー	離婚して再婚した信徒の秘跡受領	105 96~106	2008 婚姻
C・M・マルティーニ	ポストモダン世界の信仰教育	105 107~112	2008 宗教教育
K・フェヒテル	今日の司祭養成のために —イグナチオの司祭像—	105 113~125	2008 司祭職
朴 憲郁	<巻頭言>使徒パウロの使信から聞き分ける	106 2~4	2009 巻頭言
D・M・ノイハウス	パウロを再発見する —パラダイム変化の試み—	106 5~21	2009 パウロ神学
N・パウメルト	新しいパウロ観	106 22~48	2009 パウロ神学
G・キーレンケリイ	信仰による義認	106 49~59	2009 パウロ神学
H=J・クラウク	キリストの体 —I コリント書10~12章における主の晩餐—	106 60~70	2009 パウロ神学
F・ゴンサルヴェス	キリストと共に十字架にかかる	106 71~78	2009 パウロ神学
P・ヒューナーマン	ナザレのイエスとは誰か? —我らの友、キリスト・イエス—	106 79~90	2009 キリスト論
W・ジョンストン	宗教者は平和をもたらすことができるのか	106 91~102	2009 諸宗教の神学
D・M・ナイト	「み心の信心」の再生に向けて	106 103~109	2009 信仰生活
梅村昌弘	<巻頭言>『ミサ典礼書』の改訂	107 2~7	2009 ミサ
G・ダニールズ	第二バチカン公会議四十年後の典礼 —後退か、絶頂か—	107 8~29	2009 典礼一般
J・F・ボルドヴィン	典礼史の用い方の数々	107 30~46	2009 典礼史
R・F・タフト	イエズス会の典礼の課題	107 47~68	2009 典礼一般
A・T・ケイルガ	復活と葬儀典礼	107 69~80	2009 典礼神学
具 正謨	四旬節 —逾越祭儀と入信の秘跡の準備—	107 81~89	2009 典礼一般
I・イエスダサン	四旬節の精神	107 90~98	2009 典礼一般
E・S・ゲルステンベルガー	神はいずこにおられるのか —詩編作者の叫び—	107 99~114	2009 詩編
具 正謨	新『ミサ典礼書』日本語訳について	107 115~117	2009 ミサ
幸田和生	<巻頭言>司祭が司祭であることの意味	108 2~7	2010 司祭職
K・ラーナー	回心	108 8~17	2010 ゆるし
J・フックス	罪と回心	108 18~31	2010 罪
具 正謨	回心理論と現代神学	108 32~44	2010 ゆるし
B・ロナーガン	神学の土台としての回心	108 45~54	2010 ゆるし
J=M・ローラン	司祭養成の考察(1) —感情における問題点—	108 55~67	2010 司祭職
G・クッチ/H・ゾルナー	司祭養成における心理学の貢献	108 68~76	2010 司祭職
L・コフラー	まず、あなた自身を癒しなさい	108 77~80	2010 司祭職
R・ストレンジ	叙階 —我が道ではなく、イエスの道—	108 81~84	2010 司祭職
R・コルターマン	進化と創造	108 85~100	2010 自然科学と神学
J・シュミット	進化と創造信仰	108 101~117	2010 自然科学と神学
理辺良 保行	<巻頭言>「時のゆるし」としてのエコロジカル・クライシス	109 2~3	2010 巻頭言
A・C・アギレ	エコロジーの神学 —認識論的アプローチ—	109 4~16	2010 エコロジーの神学
F・ウィルフレッド	諸宗教によるエコロジーの神学に向けて	109 17~30	2010 エコロジーの神学
N・ダーラー	地球の霊性と禁欲の神学	109 31~41	2010 エコロジーの神学
フランススコ会(小さき兄弟会)「	エコロジカルな回心と環境正義 —実践のための手引き—	109 42~49	2010 エコロジーの神学
R・イルクナー	「我々の同意において我々は罪を犯す —罪の神学の 아우グスティヌスの範型をめく	109 50~61	2010 罪
M=L・グーブラー	イエスの復活 —神の国の告知としての復活信仰—	109 62~73	2010 復活
C・W・トロール	キリスト教徒とイスラム教徒の共同の祈り	109 74~89	2010 イスラム教
J=M・ローラン	司祭養成についての考察(二) —感情と霊的生活—	109 90~102	2010 司祭職
K・F・ペクラーズ	信仰を伝えるために	109 103~108	2010 現代世界と信仰
岩島 忠彦	<巻頭論文>今日におけるキリスト論 —その諸傾向と課題—	110 2~19	2011 キリスト論

総目録

T・G・ワイナンディ	カルケドン公会議 —キリスト論の現代的諸問題—	110 20～37	2011	キリスト論
E・ツェンガー	ユダヤ教の視点におけるキリスト教の神論 —いまだかつて、神を見た者はいない(ミ)	110 38～49	2011	ユダヤ教とキリスト教
J・グラナドス	マリアの記憶がキリスト理解に果たす役割	110 50～62	2011	キリスト論
M・アマラドス	世俗主義に対する宗教の答え	110 63～77	2011	世俗主義
H・シェーンドルフ	哲学と神学 —様々な姿を示す関係性—	110 78～97	2011	哲学と神学
T・シェルトル	基礎神学の位置確認 —ポストリベラル神学を背景に—	110 98～114	2011	基礎神学
J=M・ローラン	司祭養成についての考察(三) —二つの識別—	110 115～128	2011	司祭職
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—	110 129～137	2011	カトリック学校
川中 なほ子	〈巻頭論文〉ニューマン枢機卿の紋章「心が心に語りかける」	111 2～14	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	成義論	111 15～24	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	教会の三職	111 25～40	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	『平明教区説教集』	111 41～49	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	理性との関係から見る信仰の本性	111 50～63	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	キリスト教教理発展論	111 64～86	2011	ニューマン
J・H・ニューマン	同意の法則	111 87～114	2011	ニューマン
P・ミルワード	〈特別寄稿〉ニューマン枢機卿の列福	111 115～123	2011	ニューマン
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第	111 124～133	2011	カトリック学校
神学ダイジェスト編集委員会	J・H・ニューマン主要文献(邦語)	111 134	2011	ニューマン
日本聖公会(訳)	東日本大震災のための祈り	112 2～3	2012	苦難
菅原 裕二	災害を前にして	112 4～8	2012	苦難
R・シュペーマン	東日本大震災と原発をめぐるドイツ人哲学者との対話	112 9～19	2012	苦難
山脇 直司	〈解説〉ローベルト・シュペーマンの人と思想	112 20～22	2012	シュペーマン
W・グリム	東日本大震災一年を迎えて	112 23～26	2012	苦難
ザ・ワード・アマング・アス	なぜ善人に悪いことが起こるのか —ヨブ記に見る苦しみの神秘—	112 27～32	2012	苦難
A・エルヴィー	灰と塵のエコロジー神学	112 33～44	2012	苦難
E・クンツ	神の全能を語ることは今日なお意味があるか？	112 45～57	2012	苦難
J・ホール	神の愛から私たちを引き離すことはできない	112 58～61	2012	苦難
B・ロナーガン	み心の信心 —主イエスと無原罪のマリアに—	112 62～67	2012	苦難
宮本 久雄	プロメテウスの火か、聖霊の火か	112 68～78	2012	苦難
日本カトリック司教団	いますぐ原発の廃止を —福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして—	112 79～85	2012	苦難
姜 禹一	済州島ガンジェオン村に始まるアジア平和	112 86～92	2012	苦難
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第	112 93～102	2012	カトリック学校
百瀬 文晃	〈巻頭言〉第二バチカン公会議を支えた神学者たち	113 2～4	2012	巻頭言
M-D・シュニユ	教会の三位一体的基盤	113 5～18	2012	教会
Y・コンガール	神の母性と聖霊の女性性について	113 19～28	2012	聖霊
E・スキレバークス	すべての信者の教導権 —新約聖書の構造より—	113 29～44	2012	教導権
K・ラーナー	信仰、希望、愛	113 45～51	2012	信望愛
H・U・バルタザール	すべての霊性の規範としての福音	113 52～61	2012	霊性
X・レオン・デュフル	「わたしの記念としてこれを行いなさい」	113 62～69	2012	聖餐
J・ダニエル	ヨブの四つの顔	113 70～81	2012	ヨブ記
H・ド・リュバック	護教論と神学	113 82～95	2012	基礎神学
W・バイネルト	第二バチカン公会議の背景と軌跡	113 96～109	2012	第二バチカン公会議
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第	113 110～125	2012	カトリック学校

総目録

高祖敏明	〈巻頭言〉上智大学創立百周年の歴史を未来につなぐもの	114 2~10	2013	カトリック学校
米国イエズス会大学協会	イエズス会の教育とイグナチオ的教育法	114 11~15	2013	カトリック学校
尾原 悟	キリシタン時代のイエズス会教育 —ザビエルの宿願「都に大学を」—	114 16~24	2013	カトリック学校
レンゾ・デ・ルカ	対話的宣教とイエズス会の教育 —南米と日本での宣教を比較した考察—	114 25~37	2013	カトリック学校
P・サムウェイ	希望の学校「信仰と喜び」 —チャドとハイチでの実践—	114 38~43	2013	カトリック学校
V・スチュワート	世界を教室に	114 44~51	2013	カトリック学校
イエズス会アジア太平洋協議会	東チモールの聖イグナチオ学院	114 52~56	2013	カトリック学校
ベネディクト十六世	教育に携わる修道者とカトリック校の学生に向けて	114 57~63	2013	カトリック学校
浦 喜孝	カトリック教育に関するバチカン公文書 —公文書解説・日曜日の教育学—	114 64~82	2013	カトリック学校
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第	114 83~92	2013	カトリック学校
F・J・マルティネス＝メディナ	神の言葉と聖画像の関係性	114 93~105	2013	図像学
G・モンタギュー	聖ルカからの手紙	114 106~110	2013	黙想
J・A・コモンチャク	ベネディクト十六世の謙遜 —求められるローマの謙遜—	114 111~114	2013	教皇
J・カー	見過ごされた愛の教え	114 115~117	2013	教皇
M・ヘブルスワイテ	暗い日々から春へ	114 118~122	2013	教皇
D・オレアリー	跪く権威	114 123~126	2013	教皇
浜口 末男	〈巻頭言〉信仰を生きる	115 2~5	2013	巻頭言
V・ロスキー	信仰と神学 —『正教神学概論』(第一回)—	115 6~21	2013	ギリシャ正教の神学
V・ロスキー	二つの一神教と三位一体 —『正教神学概論』(第一回)—	115 22~44	2013	ギリシャ正教の神学
磯村 ロサ	交わりのうちに	115 45~46	2013	随想
B・クノルン	神に向かい、神と語り合う —霊操による対話—	115 47~65	2013	霊操
N・スタンダート	イエスと出会うために —霊操に於ける「場所の設定」—	115 66~80	2013	霊操
N・ヒンターシュタイナー	新時代の宗教的成長のために	115 81~92	2013	宗教心理
A・コント＝スポンヴィユ	魂の救い	115 93~104	2013	無神論
C・テオボルド	司教の団体性における「時のしるし」の識別 —第二バチカン公会議の未知なる体験	115 105~114	2013	司教の団体性
A・メニケス	捕囚期以前の唯一神礼拝に関する神学的発展史	115 115~124	2013	古代イスラエル史
百瀬 文晃	〈巻頭言〉下からのキリスト論	116 2~4	2014	巻頭言
G・グティエレス	神について語る —解放の神学の方法—	116 5~13	2014	解放の神学
L・ボフ	解放のプロセスとイエス・キリストにおける救い	116 14~27	2014	解放の神学
J・ソブリノ	ラテンアメリカ —罪とゆるしの地—	116 28~42	2014	解放の神学
A・ピエリス	イエスの貧しさに倣うとは	116 43~57	2014	清貧
E・シュスラー＝フィオレンツァ	フェミニスト神学の役割 —沈黙を破り、存在を示す—	116 58~72	2014	フェミニスト神学
H・キュンク	エキュメニカルな諸宗教の神学に向けて	116 73~82	2014	エキュメニズム
R・パニカー	至高体験 —東洋と西洋—	116 83~95	2014	諸宗教の神学
N・ローフィンク	主の祈りとモーセ五書	116 96~102	2014	主の祈り
V・ロスキー	創造(一節～三節) —『正教神学概論』(第二回)—	116 103~118	2014	ギリシャ正教の神学
岡田 友季子	〈巻頭言〉共同宣教司牧を通して	117 2~4	2014	巻頭言
P・レイクランド	「信徒」の概念	117 5~13	2014	信徒使徒職
M・C・L・ビンゲメル	第二バチカン公会議と信徒の登場	117 14~22	2014	信徒使徒職
W・ザイベル	教会における信徒	117 23~25	2014	信徒使徒職
A・J・ベヴィラクア枢機卿	信徒の役割 —ヨハネ・パウロ二世『信徒の召命と使命』より—	117 26~38	2014	信徒使徒職
有村 浩一	〈解説〉『信徒教会奉仕職の召命と公認』より	117 39~41	2014	信徒使徒職
C・A・ボバーツ	霊の賜物とキリストの体(一コリント12~14章)	117 42~56	2014	信徒使徒職

S・K・ウツド	信徒教会奉仕職の公認	117 57～68	2014 信徒使徒職
F・ジョージ枢機卿	これからの信徒教会奉仕職	117 69～78	2014 信徒使徒職
K・キルビー	二番目の性? —新しい「女性神学」について—	117 79～84	2014 フェミニスト神学
W・J・バイロン／C・ゼヒ	彼らはなぜ教会から離れたか?	117 85～91	2014 司牧神学
V・ロスキー	創造(四節～六節) —『正教神学概論』(第三回)—	117 92～109	2014 ギリシャ正教の神学
中野 裕明	〈巻頭言〉聖ヨハネ・パウロ二世の思想	118 2～5	2015 巻頭言
J・セイヴィス	ヨハネ・パウロ二世の四半世紀	118 6～9	2015 ヨハネ・パウロ二世
M・トライポール	反対を受けるしるし	118 10～25	2015 ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	ヨハネ・パウロ二世の信仰の神学	118 26～39	2015 ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	新しい福音宣教	118 40～54	2015 ヨハネ・パウロ二世
D・ドール	社会的関心と連帯の教え	118 55～71	2015 ヨハネ・パウロ二世
M・パクワ	ニューエイジ運動とヨハネ・パウロ二世	118 72～79	2015 ヨハネ・パウロ二世
ヨハネ・パウロ二世教皇	結婚と聖体 —いのちと愛の賜物—	118 80～92	2015 ヨハネ・パウロ二世
神学ダイジェスト編集委員会	ヨハネ・パウロ二世教皇公文書リスト(邦語版)	118 93～96	2015 ヨハネ・パウロ二世
V・ロスキー	原罪 —『正教神学概論』(第四回)—	118 97～116	2015 ギリシャ正教の神学
松浦 悟郎	〈巻頭言〉今、問われる平和	119 2～5	2015 巻頭言
J・モルトマン	正義の実りとしての平和	119 6～20	2015 平和と宗教
M・ヴォルフ	宗教による暴力の正当化について	119 21～28	2015 平和と宗教
R・v・ジンナー	宗教と力をめぐる政治神学	119 29～38	2015 平和と宗教
G・ヴァノニ	シャロームと聖書	119 39～47	2015 平和と宗教
姜 禹一	済州島カンジェオン村平和会議より	119 48～60	2015 平和と宗教
F・ウィルフレッド	平和と和解のための文化資源	119 61～73	2015 平和と宗教
M・ハインツ	独身制と結婚 —犠牲を分かち合う—	119 74～80	2015 修道生活
J・マローン	修道生活における老いの霊性	119 81～95	2015 修道生活
匿名	うつと共に生きる	119 96～97	2015 修道生活
K・シャッツ	再興二百年の新しいイエズス会	119 98～111	2015 イエズス会
A・スパダロ	回勅『ラウダート・シ』への手引き —創造主への賛歌 皆の家を守るために—	119 112～125	2015 環境
鳥巢 義文	〈巻頭言〉生活の中で追体験されている父と子と聖霊	120 2～5	2016 三位一体論
K・ラーナー	三位一体に関する考察	120 6～30	2016 三位一体論
B・M・ドイル	社会的三位一体神学と交わりの教会論	120 31～48	2016 三位一体論
A・デーケン	三位一体の似姿としての人間 —三位一体論的倫理のために—	120 49～56	2016 三位一体論
M・アマラドス	ただ一つの霊と神の多様性について	120 57～67	2016 諸宗教の神学
A・T・ケイルガ	今日の秘跡 —空疎な象徴主義か、オカルト的秘術か—	120 68～81	2016 秘蹟論
O・フックス	聖書の中の暴力 —すべてわたしたちを教え導くため(ロマ15・4)—	120 82～95	2016 暴力
V・ロスキー	キリスト論〈一節～四節〉 —『正教神学概論』(第五回)—	120 96～117	2016 ギリシャ正教の神学
C・ラム	家庭に関するシノドス	120 118～124	2016 家庭
光延 一郎	〈巻頭言〉『ラウダート・シ』と原子力発電	121 2～5	2016 巻頭言
T・カルヒャー／J・ユーベルメツ	私たちの姉妹である母なる大地のために	121 6～9	2016 エコロジーの神学
D・ファレス	貧しさとの惑星の脆弱さ	121 10～24	2016 エコロジーの神学
O・エーデンホーファー／C・フラ	地球共有材への配慮を!	121 25～37	2016 エコロジーの神学
L・ラリヴェーラ	イデオロギー的批判を越えて	121 38～48	2016 エコロジーの神学
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(前編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	121 49～64	2016 エコロジーの神学
V・ロスキー	キリスト論〈五節～六節〉 —『正教神学概論』(第六回)—	121 64～75	2016 ギリシャ正教の神学

総目録

J・グラナドス	主の昇天の神秘	121 76～91	2016 キリスト論
J・L・スカ	民数記における古いものと新しいもの	121 92～103	2016 民数記
神庭 靖子	〈巻頭言〉さまざまな家族の形の中で子どもたちの思いは	122 2～6	2017 巻頭言
X・A・サンタマリア	結婚と離婚についてのイエスの教え	122 7～15	2017 結婚・離婚・再婚
J・M・ゴルド	結婚の不解消性の教え —真理と憐れみ—	122 16～22	2017 結婚・離婚・再婚
J・I・G・ファウス	結婚・離婚・再婚をめぐる神学的諸相	122 23～31	2017 結婚・離婚・再婚
J・マシア	夫婦の一致における約束、合意、シンボル	122 32～48	2017 結婚・離婚・再婚
E・ショッケンホフ	結婚の不解消性と再婚	122 49～65	2017 結婚・離婚・再婚
M・R・ダンジェロ	福音と家庭	122 66～78	2017 結婚・離婚・再婚
A・マッテオ	信仰なき最初の世代	122 79～86	2017 福音宣教
カナダ司教協議会	福音派キリスト教についての考察 —隣人との対話に向けて—	122 87～100	2017 エキュメニズム
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(後編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	122 101～116	2017 エコロジの神学
M・シーゲル	〈巻頭言〉社会教説とは	123 2～7	2017 社会教説
J・フェアシュトラテン	教皇フランシスコと教会の社会教説 —社会へと深く入り込みながら—	123 8～16	2017 社会教説
J・C・スカノーネ	教皇フランシスコと「民の神学」	123 17～33	2017 社会教説
C・F・ヒンジ	カトリック社会教説と労働正義	123 34～48	2017 社会教説
J・M・ベルゴリオ	キリスト教信仰とヒューマニズム	123 49～54	2017 社会教説
D・K・フィン	社会の構造的罪とは何か	123 55～68	2017 社会教説
W・G・ジャンロンド	愛と沈黙	123 69～77	2017 愛
V・ロスキー	聖霊の働き —『正教神学概論』(第七回)—	123 78～89	2017 ギリシャ正教の神学
T・ゼーディング	ルターの聖書釈義と教会改革	123 90～108	2017 ルター